

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和46年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001199

昭和 46 年 度

国立国語研究所年報

—23—

国立国語研究所

1972

刊行のことば

本書は、昭和46年度における研究および事業の経過について述べたものである。

46年度に刊行したものは次のとおりである。

日本言語地図(5) (報告30—5)

電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ) (報告42)

動詞の意味・用法の記述的研究(報告43)

形容詞の意味・用法の記述的研究(報告44)

幼児の読み書き能力(報告45)

電子計算機による国語研究(Ⅳ) (報告46)

国立国語研究所年報—22—(昭和45年度)

国語年鑑(昭和46年度)

昭和47年6月

国立国語研究所長

岩 淵 悦 太 郎

目 次

刊行のことば

昭和46年度の調査研究のあらまし	1
現代語の文法の研究—文体と文法との関係—	6
全国方言文法の対比研究	8
X線像による調音運動の研究	10
語の意味・用法の記述的研究—動詞・形容詞等—	11
日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査—	12
現代児童・生徒の言語能力の動態調査	16
就学前児童の言語能力に関する全国調査	19
言語の表現機能と伝達効果の研究	24
明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—	26
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	35
社会構造と言語の関係についての基礎的研究	38
現代語の表記法に関する研究	
—新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究—	43
漢字機能度の研究	49
電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—	50
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	53
科学研究費補助金による研究	62
図書の収集と整理	65
庶務報告	66

昭和46年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次のとおりである。

- | | |
|----------------------------|----------|
| (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係— | 話しことば研究室 |
| (2) 全国方言文法の対比研究 | 話しことば研究室 |
| (3) X線像による調音運動の研究 | 話しことば研究室 |
| (4) 語の意味・用法の記述的研究 | |
| —動詞・形容詞等— | 書きことば研究室 |
| (5) 日本言語地図作成のための研究 | |
| —作図ならびに検証調査— | 地方言語研究室 |
| (6) 現代児童・生徒の言語能力の動態調査 | 国語教育研究室 |
| (7) 就学前児童の言語能力に関する全国調査 | 国語教育研究室 |
| (8) 言語の表現機能と伝達効果の研究 | 言語効果研究室 |
| (9) 明治時代語の研究 | |
| —明治初期における漢語の研究— | 近代語研究室 |
| (10) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 | 第一資料研究室 |
| (11) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究 | 第二資料研究室 |
| (12) 現代語の表記法に関する研究 | |
| —新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究— | 第三資料研究室 |
| (13) 漢字機能度の研究 | 第三資料研究室 |
| (14) 電子計算機による語彙調査 | |
| —新聞を資料とする— | 言語計量調査室 |
| (15) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理 | |

- (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係—……現代日本語の文法現象が文体の形成にどうかかわりあうかという観点から、比喩表現をとりあげ言語形式と転換の性格とを規準として、比喩技法の分類整理を行なう。

そのために、文学作品の比喩表現の用例を採集した。カード化の作業を終え、そこから比喩指標（比喩表現の目じるしになることば）を抽出し分類する作業を続ける一方、辞書の比喩に関連があると思われる項目、および指標（目じるし）はないが比喩を示す用例の分類を始めた。

- (2) 全国方言文法の対比研究……昭和41年度から3年間にわたって行なった全国方言の文法に関する調査の結果について整理をすすめる一方、44年度から、4か年計画で、史的価値のたかい方言の録音とテキスト化を、各地の研究者の協力をえつつすすめている。同時に、それら方言の文法についての記述的な研究を行なっている。
- (3) X線像による調音運動の研究……前年度にひきつづき、日本語の種々の音声を発音する時の音声器官の運動を、X線映画フィルムによって分析した。
- (4) 語の意味・用法の記述的研究—動詞・形容詞等—……『動詞の意味・用法の記述的研究』（報告43）および『形容詞の意味・用法の記述的研究』（報告44）をまとめ、刊行した。
- (5) 日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査—……『日本言語地図』第5集の編修のための作業・研究を行なった。別に、資料の意味づけのための検証調査を、九州地方で行なった。
- (6) 現代児童生徒の言語能力の動態調査……児童・生徒が現代の社会的・文化的変化とのかかわりの中で、どのような言語能力を獲得するか、その実態、特徴、問題点を明らかにすることを目的とした3か年の継続調査である。本年度は文章表現力を対象にし、次年度以降の本調査のための基礎調査を東京、新潟の小中学生、各3百名について行なった。
- (7) 就学前児童の言語能力に関する全国調査……昭和42年度から就学前児童の言語能力の全国的水準を明らかにする目的で東京、東北、近畿地方の幼稚園の4、5歳児を対象に、文字力、語彙力、文法能力、コミュニケーション能力の調査を実施してきた。本年度は以下の作業を行なった。(1)昭和42年度に行なった文字力調査の最終報告書、『幼児の読み書き能力』

(報告45)の作成と刊行。(2) 43, 44年度に実施した 文法・コミュニケーション能力調査の補充調査の実施。(3) 言語能力の形成についての実験的研究として、おもに発達遅滞児を対象にしたかな文字の学習能力の形成に関する調査と形成実験。

(8) 言語の表現機能と伝達効果の研究……本年度は前年度にひきつづき「文の形成過程にあられる伝達機能の発達の研究」に集中し、今までに集めた幼児の話しことば資料について、文構造の特徴を明らかにするために、主として陳述面について分析を行なった。また、補充調査として採録した年少児の話しことばの録音資料を軽印刷に付して、『幼児のことばカード集Ⅶ』と分析研究用カードとを作成した。

(9) 明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—……明治初期の各種文献に現われた漢語の実態を明らかにするため、翻訳小説『欧州奇事花柳春話』(漢文直訳体)と『通俗花柳春話』(和文体)とについて異なり語彙表を作成し、両作品に現われた漢語の分析を進めた。また、ルビのない語の読み方を決定するため、同一訳者の『龍動新繁昌記』(明治11年)の用例カードを採集した。なお、漢語研究に関する著書論文目録の作成および、近代語資料の調査を行なった。

(10) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究……各種の言語処理システムの効率化と精度の向上をはかるための基礎的な研究として、新聞語彙調査の言語データを利用し、「語句の構造と連接形態についての調査」ならびに「漢字かなまじり文のエントロピー(文字の連続確率)の調査」を実施した。また、電子計算機に入力したデータを語彙索引の形にしてアウトプットするために、各種の「索引作成プログラム」を試作し、その実験を試みた。

(11) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究……地域社会における言語使用の変遷と変容とをみるために、既に実施した面接調査、アンケート調査の整理・集計を進めつつ、また、各種場面における言語使用の変容について具体的に資料の分析を行なった。社会構造と方言語彙との関係をみる

ためには、ひきつづき、親族語彙、特にアニ・アネ、オジ・オバ名称に重点をおいて、関東北陸の3地点の臨地調査を行なったほか、方言集から親族語彙の資料を採集した。また性向語彙について実施したアンケート調査の整理集計を進めた。

- (12) 現代語の表記法に関する研究—新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究—……今年度は、最終集計のための準備といくつかの作業を行なった。まず、問題語の検索を行なうための出典台帳カードを完成した。漢字に関する研究としては、漢字または漢字を含んで表記された語の表記台帳を作成するための、機械および人手による処理を行ない、また、新聞の漢字使用についてのいくつかの分析を行なった。また、表記に関する研究としては、語表記台帳を作成するための機械処理を進めた。
- (13) 漢字機能度の研究……3年計画の特別研究の第2年次である。国立国語研究所がこれまでに実施した婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種の語彙調査、および現在進行中の新聞語彙調査の結果を、漢字を含むデータについて集大成し、漢字による造語の実態および各語の使用頻度に関する情報を結集する。これによって、現代日本語の中での漢字の機能を各字について把握する。昭和46年度中に、雑誌調査の全漢字用例を記述し終えた。
- (14) 電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—……前年度に引き続き新聞語彙調査の作業を継続し、長単位についての機械処理を完了した。この分について短単位の情報付加作業（単位切り、漢字の読みがなづけなど）を完了した。なお、「電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)」(報告42)および『電子計算機による国語研究(Ⅳ)』(報告46)を刊行した。
- (15) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理……例年の通り新聞・雑誌・単行本について調査し、『国語年鑑』の資料として整理した。

なお、上記の研究のほかに、次下の研究題目について文部省科学研究費補助金の交付を受けた。

総合研究A 日本語の電子計算機処理のための基礎的研究(代表 岩淵悦

太郎)

試験研究(1) 社会変化と言語生活の変容(代表 岩淵悦太郎)

一般研究 B 現代語の形成過程に関する基礎的研究(代表 岩淵悦太郎)

本年度の研究組織は次の通りである。(昭和46年4月1日現在)

◇第一研究部 部長 野元 菊雄

話しことば研究室 上村 幸雄(室長) 中村 明 高田 正治

書きことば研究室 西尾 寅弥(室長) 宮島 達夫

地方言語研究室 徳川 宗賢(室長) 本堂 寛 佐藤 亮一

高田 誠

◇第二研究部 部長 芦沢 節

国語教育研究室 村石 昭三(室長) 根本今朝男 天野 清

言語効果研究室 芦沢 節(室長) 高橋 太郎(外国出張中) 大久保 愛

◇第三研究部 部長 斎賀 秀夫

近代研語究室 飛田 良文(室長) 松井 利彦

◇第四研究部 部長 林 四郎

第一資料研究室 田中 章夫(室長) 南 不二男

江川 清 中野 洋

第二資料研究室 飯豊 毅一(室長) 渡辺 友左

第三資料研究室 土屋 信一(室長) 野村 雅昭

言語計量調査室 石綿 敏雄(室長) 斎藤 秀紀 村木新次郎

現代語の文法の研究

——文体と文法との関係——

A 目 的

現代日本語の文法現象が、とくに文体の形成にどうかかわりあうか、という観点から、比喩表現をとりあげ、言語形式と比喩的転換の性格とを規準として、比喩技法の分類整理を行なう。

B 担 当 者

話しことば研究室の中村明が担当し、衛藤蓉子がその作業を助けた。

C 本年度の作業

- (1) 文学作品（作品選定の規準と結果は『年報21』に示した）から比喩表現の実例を集める作業を続け、計50編で用例採集をうちきって、カード化を終えた。
- (2) (1)の用例カードから抽出しためじるし語（現代語で比喩をあらわす言語形式を構成する要素）を、その種類・組合せ・形式・中心語の意味用法などによって分類し、項目ごとに用例をつける作業を続けた。
- (3) 前年度に、『岩波国語辞典』から抽出しカード化した比喩関連項目を、比喩的転換の根拠・種類・性格によって分類する作業を始めた。
- (4) めじるし語のない用例を、語（句）が単独で比喩的に使われる場合、語（句）の組合せで比喩的になっている場合などに分類する作業を始めた。

D 今後の予定

- (1) C(2)の作業を完了する。
- (2) (1)の結果をもとに、めじるし語の組合せや出現順を概観できる 相 関 図

を作成し、比喩を形成する言語形式上の条件や傾向をさぐる。

- (3) C(3)の作業を完了する。
- (4) C(4)の作業を完了する。
- (5) (4)の結果から、単独比喩の場合を、(3)の結果にてらして整理する。
- (6) (4)の結果から、組合せ比喩の場合を、転用の種類によって整理する。
- (7) 用例のきわだって多い「よう」をとりあげ、(1)の二次分類をほどこす。
- (8) 比喩の総合的考察を行ない、用例を言語面の諸条件から類別し、比喩技法の再整理をこころみる。
- (9) 研究報告「比喩の分類」（仮題）を執筆する。

（中 村）

全国方言文法の対比研究

A 目 的・意 義

日本語の方言の文法を、相互に、また、標準語と比較できるかたちで、研究する。そのために、国立国語研究所地方研究員の協力をえて、沖縄をふくむ全国の方言について、統一的な方法による調査を行なう。研究の重点を、方言の文法現象のうち、文の述語として用いられる各種形式の形態論的構造の記述におく。

この研究の目的は方言の文法について、統一的な方法による全国的規模の調査を行なうことによって、今後の、方言および標準語の文法の各種の研究に必要な基礎資料をえることである。また、えられる資料は、方言地帯における標準語教育を改善するために役立つはずである。

なお、この研究は、地方言語研究室が昭和38年から行なってきた「各地方言の共通語との対照的研究」をひきつぐものである。

B 担 当 者

話しことば研究室の上村幸雄（室長）、高田正治、衛藤蓉子の3名が担当した。今年度行なった諸方言の録音とテキスト化は、つぎのひとびとの協力によるものである。

加治工真市（沖縄国際大学講師）、宮良安彦（沖縄八重山高等学校教諭）
石垣繁（沖縄八重山農林高等学校教諭）、伊良皆京子（沖縄工業高等学校教諭）、
本村勝史（沖縄宮古高等学校教諭）、本永清（沖縄宮古高等学校教諭）、
砂川ヒロ子（沖縄名護高等学校教諭）、比嘉成子（沖縄工業高等学校教諭）、
岡村隆博（鹿児島県大島郡天城町天城中学校教諭）、田畑英勝（鹿児島県大島高等学校教諭）、
寺師忠夫（もと鹿児島県大島実業高等学校長）、石崎公曹（鹿児島県名瀬市名瀬中学校教諭）、浅沼良次（東京都八丈

高等学校教諭), 加藤宜彦 (東京都八丈町三原中学校教諭), 角谷和代 (陶芸家), 稲垣正幸 (都留文科大学教授), 後藤岩雄 (秋田県雄勝郡十文字町植田小学校教諭)

C 本年度の経過と今後の予定

本年度はつぎの仕事をおこなった。

- (1) 41年度から43年度までの調査結果の整理
- (2) 補足のための調査

41年度から43年度までの調査を補足するために、八丈島および奄美諸島において、文法の調査と録音資料の採集とを行なった。

- (4) 方言の録音とテキストの作成

話しことば研究室では、方言のほろびてゆくなかで、信頼できる、良質の研究資料を今後に確保するために、これまでも、方言の録音とテキスト化 (音声表記, 標準語訳, 注つき) とを行なってきたが (『年報20』P. 8, 『年報21』P. 15参照), 46年度は, 前記の人々の協力によって, 沖縄, 奄美, 八丈島, 本土の僻地の合計16地点において録音とテキスト化とを行なった。また, 45年度に録音, テキスト化をおえたもののうち, つぎの2点を方言録音資料シリーズの続編として印刷した。

(シリーズナンバー)	(方言名)	(編者)
13	静岡県旧大川村方言(1)	山口 幸洋
14	静岡県旧大川村方言(2)	山口 幸洋

録音とテキスト化の仕事は44年度から47年度までの4年間に, 各地の方言研究者の協力をえて合計50箇所以上の方言について行なう予定である。対象とする方言は国語史的な価値の高い僻地 (奄美, 八丈島など, また内陸部僻地) を主とする。また, その成果は順次, 方言録音資料シリーズとして印刷していく予定である。

(上 村)

X線像による調音運動の研究

A 目 的・意 義

標記の研究は、話しことば研究室が継続的に行ないたいとかがえている日本語音声の研究の一部をなすものである。音声の研究は、現代日本語の音声の、音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴、指導法などをあきらかにすることを目的としておこなう。おもに標準語の音声を分析の対象とするが、今後は比較の必要から、方言や外国語の音声、または、病的異常のある音声も対象とすることがありうる。

B 担 当 者

話しことば研究室の上村幸雄（室長）と高田正治が担当した。

C 本年度の作業

本年度も、ひきつづきX線像による調音運動の研究をつづけ、標準語の個々の単音を発する際のX線映画フィルム像の計測とトレース作業とを行なった。また、そのとき発せられた音声について、ソナグラムおよびオシログラムによる分析を行なった。

D 今 後 の 予 定

上の研究は、予定よりおくれたが47年度まででおわり、48年度から次の研究へうつる予定である。また、47年度中に成果を刊行する予定である。

（上 村）

語の意味・用法の記述的研究

——動詞・形容詞等——

A 目 的

現代語の動詞・形容詞等の意味・用法を，言語作品の中で実際に使われた用例によって分析・記述する。

B 担 当 者

前年度におなじく，動詞は宮島達夫，形容詞は西尾寅弥（室長）が分担し，高木翠が全般の作業を助けた。

C 本年度の作業

これまでの記述の結果を9月末までに原稿にまとめた。そして『動詞の意味・用法の記述的研究』（報告43）および『形容詞の意味・用法の記述的研究』（報告44）として刊行した。

D 今 後 の 予 定

次年度は，語彙論に関する小調査を行ない，また48年度からの研究計画の準備をする予定である。

（西 尾）

日本言語地図作成のための研究

——作図ならびに検証調査——

A 目 的

現代日本語の方言的基盤を地理的に展望し、かつ、日本語の歴史を言語地理学的に考察するために、日本語地域全域を対象とする『日本言語地図』全6巻を作成する。

あわせて、『日本言語地図』に盛られている資料の性格を明らかにするための、検証調査を行なう。

B 担 当 者

地図作成については、第一研究部長の野元菊雄、地方言語研究室の徳川宗賢(室長)、本堂寛、佐藤亮一、高田誠が共同してあたり、白沢宏枝、山田千枝子が協力した。また、非常勤職員W. A. グロータースほか、多くの人々の援助を受けた。

検証調査は、地方言語研究室の徳川、本堂、佐藤、高田が協力して実行した。

C 本年度の研究

昨年度までの経過については、既刊の『日本言語地図』および『年報7』以下を見られたい。

『日本言語地図』そのものの作成については、第5集編修のための作業・研究を行なった。

検証調査については3種の調査を行なった。

その1は、熊本県八代市と人吉市とを結ぶ、球磨川に沿った約60か所の集落を訪ねる調査である。目標は、各地点における、もっともくだけた表現からもっともあらたまった表現にいたる各段階の表現(家族・親友間の私的な

会話時のことば、会合の席でのことば、他出時の初対面の人に対することば……などと言い換えることもできよう）が、それぞれどのような地域差を持ちながら、多層的に存在・交錯しているかを明らかにするところにあった。

『日本言語地図』をはじめとして、いわゆる言語地図は、原則として、もっともくだけた表現（家族・親友間の私的な会話時のことば）の地域差のみを材料として採り上げてきたが、近年、地域社会で使用されている言語の現実には、単に方言と標準語との二層の対立に分解できない、いっそう複雑なものであると考えられる。昭和46年11月中旬に準備調査を実施し、年度末に本調査を実施した。

検証調査の2は、前年度に行なった<10か年の間隔をおいた同一内容の調査の結果間の比較>の延長ともいうべき調査の(A)である。

前年度、長崎県松浦市、長崎県南松浦郡での再調査に際して、昭和34年度の調査が、全く記憶されていない（痕跡がえられない）事実があった。特定地域にまとまっているように思われるので、同年の同地域の調査地点を、同行調査地点を除いた7地点について、すべて実地踏査した。

各地点の結果は次の通り。

松浦市御厨町駅通り（7238.86）昭和34年度調査の被調査者と同名の人物が現存するが、経歴は報告のものと違い、出身地もここでない。当人に調査の記憶がない。

南松浦郡新魚目町立串（7256.64）昭和34年度調査の被調査者と同名の人物が現存するが（現町長）、経歴は報告のものと違う。同名異人はいないという。当人に調査の記憶がない。

西彼杵郡大島町幸町（7258.64）昭和34年度調査地点は、報告地図には幸町でなく大島郷の位置が示されている。幸町は新開地。被調査者と同名の人物は幸町にいた医師（よその出身）で、現在佐世保市在住。当人に調査の記憶がない（電話連絡）。経歴は報告のものと通じるところがある。別の同名人物がいなかったとはいえないが、いたとしても、この出身者ではなかろう（役場調べ）。

東彼杵郡川棚町中組郷（7259.54）昭和34年度の被調査者は、すでに死亡している（ようである）。報告されている経歴は、一部正しいようである。家族は調査を当人が受けたことについて記憶していない。

南松浦郡奈留島村浦（7275.07）昭和34年度の被調査者については、手掛りがない。知る人がない。調査地点は、新開地。

南松浦郡久賀島村久賀（7275.24）昭和34年度の被調査者については、手掛りがない。同名（いま富江町に在住している現在30歳前後の中学教師）があるらしいが、はっきりしない。

北高来郡小長井村川原浦（7360.47）昭和34年度の被調査者と同名（人名が、隣町から当町に通勤する中学教師の父（南高来郡有明町湯江在住）として現存する。ただし、経歴は報告のものと違う。小長井村には同名人はいない。

以上のように、全地点で、通常の調査が行なわれたとは思えないふしがある。そこで昭和34年度の調査の追跡とは別に、それぞれの地点で、条件にあう別人をさがし、その人々についての調査結果を、あらためて求めた。現在『日本言語地図』上に登載されている当該地域の昭和34年度の調査結果が万一破棄されねばならぬとき、それにかわるものを得ておく必要があると考えたからである。

検証調査の3は、前項と関係が深く、＜10か年の間隔をおいた同一内容の調査の結果間の比較＞の延長ともいうべき調査の（B）である。記憶のないこと、手掛りのえられぬことは、正式な調査が行なわれなかったことと同義と考えていいのか、（A）のようなことは他地域では絶対にありえないのか、念のため確かめようとする。全国的に往復はがきを発送して、調査の記憶を尋ねた。この往復はがき調査には、報告されている被調査者の生年、兵歴をわざとずらせて与えて、それを正確なものに訂正してもらう形式を採用した。これは、返信率を高めることにも役立つと考えたからである。もちろん、往復はがきによるこの質問で、すべての問題が解決するとは思っていない。転居があり、死亡があり、記憶違いというものがある。まず予備調査を行ない、

次に研究室員の調査地点全地点について調べ、その返送状況や回答状況をみて、その後に、地方研究員分担の地点のなかからランダムに選んで調べた。

D 今後の予定

『日本言語地図』の作図・編修の作業は、第6集完結まで続ける。その期間中毎年新しい観点による検証調査を企画し実行する。検証調査全般の詳しい内容および結果については、機会を改めて報告する。

(徳 川)

現代児童・生徒の言語能力の動態調査

A 目 的

この研究は、児童生徒が、現代の社会的・文化的変化とのかかわりあいの中で、どのような言語能力を獲得するか、その実態・特徴・問題点を明らかにすることを目的とした3か年の継続研究である。

B 担 当 者

国語教育研究室の村石昭三（室長）、根本今朝男が担当し、芦沢節（第二研究部長）が参画した。また、川又瑠璃子がこれを助けた。なお、非常勤職員岡本奎六（前期）の協力を得た。

C 本年度の作業

本年度は文章表現力を対象にし、次年度以降の本調査のための基礎調査を東京・新潟の小学校6年生(計300名)・中学校3年生(計300名)について行った。また、作文の評価法の開発を目ざして、作文評価委員を委嘱し、委員会を設けて、評価観点の設定および実作作文の評価結果について検討した。なお、この調査の一環として、中学生(2年生)の漢字使用に関する調査を東京で実施した。

1 文章表現力の構造の基礎調査

文章表現力の構造の基礎調査として、テストA（主として、文章表現のための言語能力を見るためのもの）、テストB（テストAの実施結果から導かれた補充テスト）、および、これらの妥当性を見るための調査(統制された条件による課題作文・国語総合学力検査・知能検査)を行なった。

テストAと妥当性を見るための調査は46年12月に、テストBは47年3月に実施した。これら諸調査の実施について、協力学校として次の各学校の協力

を得た。

東京都

中央区立明石小学校（校長 園田成孝）

世田谷区立上北沢小学校（校長 八木徹夫）

板橋区立志村第四小学校（校長 高野萬平）

北区立岩淵中学校（校長 進藤末治）

お茶の水女子大学附属中学校（校長 中村一良）

練馬区立北町中学校（校長 須田孝）

新潟県

新潟市立木戸小学校（校長 松田潔）

新潟市立関屋小学校（校長 高島政雄）

新発田市立七葉小学校（校長 宇賀村清）

西蒲原郡巻町立漆山小学校（校長 若林栄）

新潟市立関屋中学校（校長 竹内三一郎）

新潟市立寄居中学校（校長 本多孝助）

新発田市立加治中学校（校長 大沼興兵エ）

西蒲原郡巻町立漆山中学校（校長 佐藤忠彦）

2 作文評価法の研究

評価委員（10名）を委嘱し、評価委員会を設けて、作文評価の観点・評価の方法について研究を進めた。とくに本年度は、統制された条件によって書かせた作文を複数の評価者（4人）によって評価する方法（同一作文を評価者相互は連絡し合うことなく評価する）を試みた。評価委員は次のとおりである。

岡本奎六（成城大学教授）

風間章典（東京都板橋区立志村第四小学校教諭）

北上義夫（新潟市立関屋小学校教諭）

木村龍伍（新潟市立木戸小学校教諭）

小竹省三（新潟県教育委員会指導主事）

斎藤喜門（お茶の水女子大学附属中学校教諭）

佐久間佳人（新潟市立寄居中学校教諭）

田中忠夫（新潟市立関屋中学校教諭）

中津留喜美男（東京都中央区立明石小学校教諭）

吉村安夫（東京都北区立岩淵中学校教諭）

3 中学生の漢字使用に関する調査

昭和43年度改訂の小学校学習指導要領によって、小学校段階で提出されることとなった115字（いわゆる備考漢字）の使用の姿を見るための調査である。一字一字を数語ないし十数語の語形で、文脈・語脈を与えて書かせることによって、どの字がどのような語において書きやすく、どのような語においてどのように誤りやすいかなどの点を明らかにし、指導上の基礎的資料を提供しようとするものである。調査は、東京都北区立稲付中学校、同じく北区立岩淵中学校の3年生各2クラスの生徒を対象として、46年10月に実施した。

以上のべてきたどの調査についても、約8割程度の整理集計作業を終了しているが、結果の分析・考察の仕事は次年度に行なう予定である。

D 今後の予定

来年度は、本年度の調査の結果に基づき、中学3年生を対象にした文章表現力の本調査を行なう予定である。

（根 本）

就学前児童の言語能力に関する全国調査

A 目 的

幼児・児童・生徒が言語・文字をどのように習得し、どのように使用するか、またその要因はなにか等を明らかにする言語発達の研究は、国語教育、とくにその教育計画や指導法の確立、改善のために欠くことのできぬ基礎的な仕事として重視されなければならない。現代の就学前児童（4歳児クラス5歳児クラス）の言語諸能力の発達の実態を明らかにするため、昭和42年度より昭和44年度にかけて、本調査を実施してきたが、本年度は昭和42年度に本調査を実施し、昭和45年度に補充調査を行なってきた「幼児の読み書き能力」についての報告書を作成・公刊する。また、昭和43、44年度に実施した語彙・文法・コミュニケーション能力調査の補充調査を行なうとともに、言語学習能力の形成についての実験的な研究も行なう。

B 担 当 者

国語教育研究室の村石昭三（室長）、天野清が担当し、福田昭子が作業を助けた。検証補充調査の諸段階では、実験協力園2園、調査協力園7園、調査協力校3校の協力を得たほか、多くの調査員の協力を得た。

C これまでの作業

昭和42年度 就学前児童の文字力調査——文字力の全国的水準を明らかにするためのひらがなの清音、撥音、濁音、半濁音の読み・書きテスト、拗音、長音、拗長音、促音および助詞「は」「へ」の読みテスト。他に特定幼児の文字調査。

昭和43年度 就学前児童の語彙力調査——基本的な語の理解水準を調べるための範疇化テスト、性状語テスト、時間空間語テスト、動詞分化テスト。

昭和44年度 就学前児童の語彙，文法，コミュニケーション能力調査——前年度と同じ目的をもった「動詞テスト」と文法・コミュニケーション能力を調べるための「文の作成・変換テスト」「物語の再生・伝達テスト」を実施した。

昭和45年度 昭和42年度に実施した文字力調査の検証補充調査を行なうとともに，昭和42年度調査データの集計・整理・報告書原稿の作成の作業を行なった。また，昭和45年11月7日，東京・銀座・ガスホールで「幼児の読み書き能力」の報告会をひらき，その中間報告にあてた。

D 本年度の作業

1 「就学前児童の文字力調査」の集計報告書作成

昭和42年度に実施した就学前児童の文字力調査，家庭・幼稚園へのアンケート調査，昭和45年度に実施した検証補充調査のデータの整理・分析の作業を進め，報告書原稿を作成し，昭和47年3月，下記の報告書を刊行した。

『幼児の読み書き能力』（報告45）B 5判528ページ（東京書籍KK刊）

2 語彙・文法・コミュニケーション調査の検証・補充調査

（a） 幼児の文法・コミュニケーション能力についての補充調査

以下の内容をもつ「文の作成と結合テスト」を作成し，京都，東京，仙台の6幼稚園で，5歳クラス児約110名，4歳クラス児約80名を対象に調査を実施した。

このテストは，幼児が文をつくるルールを習得していく過程を明らかにするため，昭和43年の「動詞分化テスト」調査と44年の「文の作成・変換テスト」調査にひきつづいて，4歳，5歳，6歳の幼児を対象に，接続詞，および接続助詞を用いて，二つの文を結合する課題を与え，彼らが，どの程度，結合のルールを習得しているかを調べることを目的としたもので，テストは次のサブテストから構成されている。

I 接続詞「そして」「けど」「そしたら」の使用と分化

練習 一組3問

本テスト 二組 6 問 (絵図にはもう一組はいつているが使用しない)

- (例) i) 太郎はちょうちょを追いかけた。そして太郎はちょうちょをつかまえた。
- ii) 太郎はちょうちょを追いかけた。だけどちょうちょは逃げた。
- iii) 太郎はちょうちょを追いかけた。そしたら太郎は穴におっこちた。

II その他の接続詞の使用

(A) 順接・逆接 (「だから」, 「だけど」)

練習 なし

本テスト 二組 4 問

- (例) i) ウルトラマンは怪獣より小さい。だけどウルトラマンは怪獣をたおした。
- ii) ウルトラマンは怪獣より小さい。だからウルトラマンは怪獣にたおされた。

(B) 原因 結果 (「だから」, 「だって」)

練習 途中に 1 問

本テスト 二組 4 問

- (例) i) 花子はお皿をわった。だから花子はお母さんにしかられた。
- ii) 花子はお母さんにしかられた。だって花子はお皿をわったから (わったんだもん)。

III 接続詞の内容にあった文の作成

練習 なし

「だけど」 2 問, 「だから」 2 問, 「そしたら」 1 問, 「そして」 2 問

- (例) i) うさぎはかめよりはやい。だけど……………。
- ii) うさぎはかめよりはやい。だから……………。
- iii) 太郎は犬のしっぽをふんだ。そしたら……………。
- iv) 太郎は犬のしっぽをふんだ。そして……………。

IV 接続助詞による文の結合

練習 一組 3 問

本テスト 二組 6 問

- (例) i) 太郎はちょうちょを追いかけて、ちょうちょをつかまえた。
ii) 太郎はちょうちょを追いかけたけれど、ちょうちょは逃げた。
iii) 太郎はちょうちょを追いかけたら、穴におちた。

調査にあたっては下記の幼稚園の協力を得た。

保善寺幼稚園 東京都中野区上高田 1—31—2
道灌山幼稚園 // 荒川区西日暮里 4—7—15
開智幼稚園 京都市下京区御幸町仏光寺下ル
園部幼稚園 京都府船井郡園部町小桜
東仙台幼稚園 仙台市燕沢字苗代東30
鹿島台第一幼稚園 宮城県志田郡鹿島台町平渡字上戸 8—1

(b) 幼児の語彙能力についての検証調査

昭和44年に実施した動詞テスト絵図(Ⅰ)(Ⅱ)を利用して、特定個人にすべてのテストを行ない、動詞の語彙力を調べる調査を実施した。

被調査児……約10人

調査園……明昭第二幼稚園 葛飾区堀切町 1—41

3 言語学習能力の形成についての実験的研究

(a) 発達遅滞児のかな文字の学習の可能性についての調査と実験

- i) 下記の3養護学校小学部の生徒約100名と幼稚園、保育園の幼児約50名を対象に以下のテストを実施した。

- ① かな文字の読みテスト
- ② 音節分解・音節抽出テスト
- ③ 構音テスト
- ④ リズムテストと両手の交互開閉テスト

調査協力校

都立八王子養護学校 東京都八王子市台町 1 番地
都立王子養護学校 東京都北区十条台 1—8—41
東京教育大附属大塚養護学校 文京区春日 1—5

調査協力園

北区立王子保育園 東京都北区王子 3—7

道灌山幼稚園 東京都荒川区西日暮里 4—7—15

- ii) 上の児童のうち、まだかな文字を習得しておらず、また自然に習得できる学習能力をもっていないと思われる約20名の児童を対象に、一定の訓練プログラムに基づいて、かな文字の習得に必要な学習能力を形成するための訓練を実験的に試みた（都立王子養護学校）。

（B） 幼児の書字行動についての実験

幼児の書字行動と知覚の特質を調べるため12人の幼児（5歳児クラス）を対象に、かな文字、漢字の読み、書きテストを実施した。

調査協力園 帝京幼稚園 東京都板橋区加賀 2—11—1

D 今後の予定

昭和47年度に、幼児の語彙・文法・コミュニケーション能力について、再度検証補充調査を行なう。

（天 野）

言語の表現機能と伝達効果の研究

A 目 的・意 義

この研究は言語の表現機能や伝達効果を、言語そのものとの関連において、とらえようとするものであるが、表現機能や伝達効果と言語の法則性とは関連する事項のうち、まず、次のⅠとⅡのふたつのテーマをとりあげた。

Ⅰ 言語表現における場面の効果の研究……場面によって言語表現がどのような変容を示すかを、伝達という観点からしらべ、あわせて、場面の分析および表現の分析を行なうことを目的とする。

Ⅱ 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究……幼児のコミュニケーション機能の発達は、言語の獲得あるいは言語活動の形式の分化のなかに、さまざまな形であらわれる。言語の表現機能と伝達効果を、幼児の文表現が成立し、文形式が形成されていく過程でとらえようとする。

B 担 当 者

本年度はⅡの仕事に集中した。大久保愛が担当し、鈴木美都代がこの作業をたすけた。

C これまでの経過

Ⅱの研究テーマの経過についてのべる。

幼児の場合、言語行動の能力は、言語使用能力ときわめて密接な関係をもっているので、幼児の使用する言語の分析からはじめることとした。まず、幼児期における一応の到達点（乳児期よりはじまる言語獲得過程の、一応の到達点）として、4～6歳児の使用する言語の実態を分析することからはじめた。伝達活動の言語的な単位は（幼児の場合、しばしば、未完成文のなかに伝達の単位を見いだすことができるが）、陳述の完成する文であるとされ

ているので、文の構文論的な分析を主として、その構成要素である単語の形態論的な分析をこれにくわえて、研究をつづけてきた。これまでに、4～6歳児の文型の概観、連体修飾法、補足文、動詞の形態、名詞の格のつかいかた、文末形式の種類、接続詞の用法などについて分析した。

幼児の言語を具体的に分析するためには、大量の資料を必要とするので、幼児の言語を録音し、それを文字化してカードにする方式をとった。45年度までに、年長児115名、年中児121名、年少児35名、計271名についての録音を文字化して、5種の『幼児のことばカード集』と分析研究用カード（異なり約5,000枚）を作成した。さらに43年には同じ方法で3児（3歳、4歳、5歳）の家庭における自由な場面での発話を録音した資料によって『幼児のことばカード集』1冊と分析研究用カード（異なり1,530枚）を作成した。

D 本年度の作業

本年度は次の作業を行なった。

- (1) 幼児のことばカード集およびカードの作成。

昭和45年度に録音・文字化した年少児34名の話しことば（調査者と幼児による問答形式によるものの続き）を『幼児のことばカード集Ⅶ』（42ページ）、と分析研究用カード（異なり約300枚）を作成した。これで年少児の分析研究用カードは、863枚（異なり）となった。

- (2) 文の構造についての文法的分析

本年度は従属文の分析を主として行ない、「幼児の従属文の形式と用法」

- (1)、(2)として謄写印刷した。

E 今後の予定

(2)の文の構造についての文法的分析は、これで一応終わったので、報告書『幼児の文構造の発達』（仮題）として、来年度出版を予定している。

また、これまでに手がけた単語の形態論的分析および連語論的分析を継続して行ない、今後なんらかの形でまとめたいたいと考えている。（大久保）

明治時代語の研究

——明治初期における漢語の研究——

A 目 的・意 義

明治初期は、現代語の源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化にともない、日本語は大きく変化した。中でも、語彙の変化がはげしく、それは漢語にもっとも著しく表われている。そこで、明治初期の各種文献に現われた漢語の実態を調査し、現在の漢語と比較対照する。さらに、大正期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語および漢字表記の変遷の条件と方向とを見きわめ、現代語成立の歴史的背景を明らかにしようとする。

B 担 当 者

飛田良文（室長）・松井利彦・梶原滉太郎（47. 3. 22東北大学から転任）が共同して作業にあたり、斎賀秀夫（第三研究部長）が参画した。また、牧野正子がこれを助けた。

C これまでの経過

近代語研究室では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行ない、その成果については、そのつど年報または報告書に発表してきた（『年報』7～20、および『明治初期の新聞の用語』（報告15）参照）昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書8種の総索引を作成し、現在、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との調査を行なっている。

D 本年度の作業

明治初期の漢語研究のため、次の作業を行なった。

- (1) 『花柳春話』の語彙表作成と漢語の分析
- (2) 丹羽純一郎訳『龍動新繁昌記』（明治11年）の用例カードの採集
- (3) 漢語研究のための著書・論文目録の作成
- (4) 近代語資料の調査

その成果は、次のとおりである。

- (1) 『花柳春話』の語彙表の作成と漢語の分析

本年度は、『花柳春話』の異なり語彙表を作成する作業に入った。また、ルビがない語の読み方を決めるため、同語異表記の調査を行なった。さらに参考資料を得るために(2)の作業を行なった。

なお『通俗花柳春話』には、表記のゆれている語がかなりみられるので、その主なものについて例示しておく。（ ）内の数字は、編一ページ一行を示す。なお、印刷の都合で、例文の字体は、現行の字体に改めたものがある。

表記のゆれている語

アイサツ〔挨拶・祝辭・應答・禮詞・禮儀・禮辭〕

<挨拶>

- ・時下^{と き}の挨拶^{あいさつ}もそこそこ^{うちほうえみ}にして打微（1—97—2）

<祝辭>

- ・時下^{と き}の祝辭^{あいさつまつば}先終り（4—131—6）

<應答>

- ・暑寒^{あつしきむし}の應答^{あいさつ}もそこへにして（2—88—5）

<禮詞>

- ・時侯^{じこう}の禮詞^{あいさつのべ}述終り（4—8—4）

<禮儀>

- ・皆打揃^{みなうちそろひ}て来にければ互^{たがひ}の禮儀^{あいさつをばり}終し後^{のち}（4—148—8）

<禮辭>

- ・時下の禮辭先終り（4—87—2）
- ・其日の禮辭終りし後ち（4—165—10）

イス〔榻・椅子・榻子〕

<榻>

- ・榻に凭物思はしげに坐して居り（3—66—2）
- ・榻に寄そひ立て居り（3—106—2）

<椅子>

- ・傍の椅子に腰うち掛け（2—137—10）
- ・ラムリハ椅子を起上り（4—100—5）

<榻子>

- ・二箇の榻子に腰打かけ（1—2—5）
- ・室の隅なる榻子に凭て坐を占ぬ（3—53—11）

ケシキ〔風景・風色・風光・状景・景色・華色〕

<風景>

- ・土耳其国の都府にて風景の美しきハ欧州第一とす（1—129—7）
- ・小舟に棹て湖上の風景を探りける（2—54—4）

<風色>

- ・園の風色を打眺め独語して言うやう（3—91—6）
- ・窓戸を推開き庭園の風色を視眺たり（4—51—10）

<風光>

- ・日々野辺にあこがれて春の風光を弄べど（1—69—12）
- ・春未だ浅き頃ながら自からなる風光を添（4—185—5）

<状景>

- ・其状ハ燐火の光に異ならず最と凄然状景なり（1—1—12）

<景色>

- ・海辺の月を見て和君の如く景色を愛んやと（1—126—3）
- ・話を止め湖上の景色を望けり（2—42—2）

<華色>

- ・繁榮春の華色に代へ夏の首ハ都下さへ寂寥ものを（2—120—8）

シタク〔支度・仕度・準備〕

<支度>

- ・彼辺より晚餐の支度調へりと告るに従ひ（4—30—3）

<仕度>

- ・朝飯の仕度を終りて（3—1—7）
- ・僕仕度に間をとり大人をば待せ申しけん（3—106—4）

<準備>

- ・晚餐の準備できたれば（1—99—4）
- ・晚餐の準備のなり侍ると報る（3—106—7）

シヨギョウ〔所行・所業〕

<所行>

- ・いと屢々正からざる所行ありて（2—60—12）
- ・倍々所行を正うし（2—111—1）

<所業>

- ・今より后ハ所業を改め（3—92—6）

セイジ〔政治・政事〕

<政治>

- ・平生より多く語ひて終に政治の事に及び（3—107—7）

<政事>

- ・英国にてハ毎年兩度国会を開き政事を議するの制度あり（2—109—5）
- ・僕今日のいま迄も和君の政事に関するを毫計だに思ざりしと（3—148—4）

ドウリ〔正理・是非・道理〕

<正理>

- ・年齢尚少くして已に正理を知らまふハ眞の才子に称へんも（2—6—9）

<是非>

- ・已に数月を経にければ物の是非を辨知得べし（1—62—7）

<道理>

- ・天の幸福を享べき道理あることなし（2—23—6）

- ・ 妾^{わらは}ハ物^{もの}の道理^{だうり}に疎^{うと}くて尊意^{みこよう}のほど察^{きつ}し得難^{えがた}し (2—114—12)

トケイ〔玉漏・辰器・時計・漏聲・自鳴鐘〕

<玉漏>

- ・ 玉漏^{とけい}の聲^{こゑ}ハ辰^{たつ}の刻^{ごく}を報^{つぐ}る頃^{ころ}に (4—130—3)

<辰器>

- ・ 微笑^{ほゑみ}ながら辰器^{とけい}をながめ町鈍^{あなおそ}ましや長話^{ながはなし}に太^{いた}く時刻^{じこく}を移^{うつ}しけん (1—104—11)

<時計>

- ・ 胸^{むね}に懸^{かけ}たりし時計^{とけい}を一視^{なかも}て打驚^{うちおどろ}き (4—136—8)

<時器>

- ・ 今少年^{いまわかうど}の取出^{とりいだ}せし金^{きん}の時器^{とけい}を打見^{うちみ}やり (1—10—10)
- ・ 時器^{とけい}を見れば早丑^{はやうし}刻^{みづ}に近づ^{ちか}きぬ (4—47—5)

<漏聲>

- ・ 亥^みの刻^{ごく}の漏聲^{とけい}に皆^{みな}ハ打驚^{うちおどろ}き (3—118—9)

<自鳴鐘>

- ・ 折^{まり}しも聞^{きこ}ゆる自鳴鐘^{とけい}の聲^{こゑ}は今已牌^{いまのこく}を報^{つぐ}ると共^{とも}に (4—86—10)

ニカイ〔階・樓・二階・樓上〕

<階>

- ・ 徐々^{しづか}的^{にかい}階^{おりまた}を下^{くだ}来^{ゆき}り (1—24—11)
- ・ 父^{ちち}ハまた竊^{ひそか}に階^{にかい}を下^{くだ}り行^{ゆき} (1—38—4)

<樓>

- ・ 少女^{おとめ}を抱^{いだ}き樓^{にかい}を下^{おり}て外^との方^{かた}に走去^{はしりき}んとするを見^みて (2—127—1)

<二階>

- ・ アリスの家屋^{いへ}に行^{いき}て直^{たゞ}ちに二階^{にかい}に登見^{のぼりみ}れば (2—129—10)
- ・ 老^{おい}の足列^{あしなみみ}踏^ふかため二階^{にかい}の上^{うへ}に昇^{のぼ}り行^ゆく (4—18—9)

<樓上>

- ・ 時^{とき}しも樓上^{にかい}にて談話^{はなし}の声音^{こゑ}聞^{きこ}ゆれば (1—25—5)
- ・ 四客^{よたり}を迎^{むか}へ先に立^たち樓上^{にかい}の一室^{ひとむ}に誘^{いざな}ひける (3—59—12)

フウフ〔夫婦・伉儷〕

<夫婦>

・思に此等の二人をして夫婦となさば（4—74—7）

・マルツラバースはモンテインの夫婦に別れて帰りける（4—138—3）

<仇讎>

・外面を飾るも度ぞよき似たる者ハ仇讎とハ是等の事を言ならんと（3—105—9）

・若しも和君が娶なば復比なき仇讎ならんか（4—45—1）

ヘンジ〔回答・返言・答書〕

<回答>

・和君ハ何の故ありて彼が回答の事を言ひ（4—88—9）

<返言>

・マルツラバースの家に送て返言を請ひ再び茲に帰らしめよ（4—84—5）

<答書>

・ラムリハマルツラバースより送し答書を和君に見せしやと（4—88—1）

ホンモウ〔本望・宿志〕

<本望>

・人の扶助を受ず自ら励て本望を得遂んとこそ思待れど（3—113—3）

<宿志>

・抑僕が宿志を達することの能はざるハ伊太利人に侍ればなり（2—50—9）

・和君も比二者をば待ての後に宿志を遂たまはんハ疑なし（2—52—3）

ミカン〔橙子・檳柑〕

<橙子>

・橙子ハ甚喫と袂の内より二三取出し（2—67—1）

<檳柑>

・美男子ハ猶是檳柑の皮の如しと（1—130—10）

メイショ〔名所・勝區〕

<名所>

・四方の名所旧跡を探らんものと唯單騎兎馬の歩足に任せつゝ（3—43—1）

・名所古跡を尋ぬべき便利の爲にするものなり（3—17—10）

<勝區>

・湖辺の勝區など語りて漸く話を転じ（2—53—12）

ユウキ〔勇氣・勇毅〕

<勇氣>

- ・義を見る時ハ忽ちに勇氣を發し (2—61—4)
- ・俄們的勇氣を愛て稱すべしと (2—61—12)

<勇毅>

- ・天然の勇毅衆人に勝りしが (1—26—2)

ヨウイ〔用意・準備・豫備〕

<用意>

- ・暑の時候に近づけば涼しかるべき用意にこそ又此戸棚に酒もあり (1—97—10)
- ・マルツラバースの宿にとて豫て用意をせし者なり (3—17—1)

<準備>

- ・忽地帰国の準備も整ひ (4—148—5)
- ・彼が帰来る準備に心を尽しける (4—159—1)

<豫備>

- ・旅人の旅行する豫備なり (2—28—6)
- ・明日の豫備をば免せん角せよ (4—185—2)

ヨウジ〔用事・事故・所須・要事〕

<用事>

- ・はたと打忘れし用事のあるを思出せば (4—58—1)
- ・伊国の事など話し做し別に用事もあらざりけん (4—138—7)

<事故>

- ・余ハ今日しも些ばかり事故のあれば出て来ん (1—98—3)

<所須>

- ・余ハ今より有旧許へ所須のありて行なれば明日ハ必ず夙来ね (3—96—3)

<要事>

- ・汝が言ふ家尊大人に要事のありて来つるなりと (3—102—10)
- ・否要事にはあらねども今朝より読書に時を費し (4—183—1)

ヨウス〔状態・事情・病勢・寤寐・様子〕

<状態>

・竊に父の寢室に往狀態如何と窺ける (1—21—10)

・アリスと客の狀態を窺 (1—24—8)

<事情>

・何事が事情ありての義に侍るやと (2—100—6)

・実に解し易からぬ深き事情のありてならんと (3—107—5)

<病勢>

・疾々病の床に行き病勢を問せたまへかしと (4—110—10)

<寢寐>

・和君の寢寐を窺ひしを妾ハ如何にと思案しに (1—38—4)

<様子>

・大人の病ハ稍少し癒させ給ふ様子なり (1—77—7)

・今日の様子ハ如何なるや聞せてたべ (4—107—12)

ヨウダイ〔容體・病體・様態〕

<容體>

・右手に尿管を突立たる其容體ハ自から善人なりとハ見ざりき (1—2—11)

<病體>

・屋内より出る者あれば其病體を問ぬハなし (4—107—11)

<様態>

・華族の宣下を被ればテンブルトンにあらずしてバーグレーブ侯の様態を為ねば最
尊からず (4—72—12)

(2) 丹羽純一郎訳『龍動新繁昌記』(明治11年)のカード採集

『龍動新繁昌記』三冊(明治11年)は、『花柳春話』と同じ訳者でその文体も『欧州奇事花柳春話』と同じ漢文直訳体であり、しかもルビが多い。そこでルビの少ない『欧州奇事花柳春話』の読み方を決める参考資料として、ルビのある語を中心にカード採集を行なった。

(3) 漢語研究のための著書・論文目録の作成

前年度までに作成した目録に、気のついたものを補充した。

(3) 近代語資料の調査

本年度は、熊本大学図書館（時習館文庫）、金沢大学図書館・同医学部図書館、福井県立大野高校図書館の幕末明治初期文献の調査を行なった。金沢大学図書館および、同大医学部図書館では、幕末明治初期の翻訳書、特に、医学関係の翻訳書について調査した。また、福井県立大野高校図書館では、蘭学関係文献の調査を行なった。（以上、飛田担当）

熊本大学図書館では、時習館文庫の調査を行なった。（松井担当）

金沢大学では、助教授川本栄一郎氏、経理課長三浦清伍氏、第一整理係長藤井信英氏、医学部図書係長筒井盈年氏のお世話になり、福井県立大野高校では、福井大学教授佐藤茂氏、福井県教育委員会指導主事天野俊也氏、福井県立大野高校長小林郁夫氏のお世話になった。

E 今後の予定

来年度は、本年度の作業を継続して、異なり語彙表を作成し、和語・漢語・外来語の割合を比較して、文体と語種との関係、および、漢語の語形・意味・表記についての分析を行ないたいと考えている。

（飛 田）

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目 的・意 義

電子計算機を使って、日本語のデータを処理しようとする、ことばや文字を扱わせる上で、さまざまな問題が生じてくる。たとえば、かな書きのデータの場合には、同音語が処理の障害になるし、漢字かなまじりの場合には同形の文字列（例「工夫 コウフ/クフウ」など）の判別が問題になってくる。また、文字の面では、日本語の文字列の中に、かな文字・ローマ字・数字・記号あるいは漢字などが、どのような連続で現われやすいかを把握しておくことなども、処理の効率や、プログラムの精度の上に、大きな影響もってくる。以上は、ほんの一例であるが、このような、日本語の機械処理を進めるさいの諸問題を解決していくためには、さまざまな基礎的調査が必要になってくる。

この研究の当面の目的は、まず、こうした問題を研究していくための、基礎的な研究資料を作成することであるが、それに基づいて、日本語の電子計算機処理の基礎理論（アルゴリズム）を検討し、処理の効率化と精度の向上をはかるものである。したがって、その成果は、国語資料の機械処理に理論的根拠を与え、各種の言語情報の機械処理の進展に役立つものとなる。

B 担 当 者

この研究は、第一資料研究室の田中章夫（室長）・江川清・中野洋・鶴岡昭夫（46.8.1採用）が担当し、言語計量調査室の石綿敏雄（室長）斎藤秀紀・村木新次郎の協力のもとに進められた。また、第一資料研究室の益子芳江・堀江久美子・紺野雅子（46.6.30退職）が、研究作業を助けた。

C これまでの研究経過

電子計算機の導入以来、大量語彙調査の調査方式の検討・調査システムの開発のほか、「言語単位の自動分割」「漢字データの機械処理法」「構文解析の自動化」「語種・品詞・活用など言語学的な諸情報の処理方式」等の研究を行ない、その成果は『電子計算機による国語研究』（報告31）および『電子計算機による国語研究（Ⅱ）・（Ⅲ）』（報告37・39）に発表してきた。

また話しことば資料については、昭和38年に松江市で収録した録音テープの内容を入力し、その中から敬語関係のものをまとめて『待遇表現の実態』（報告41）として公表した。

以上のほか、昭和43年度・44年度には、文部省の科学研究費（試験研究）による「言語情報処理における漢字処理の実験的研究（研究代表者・林四郎）」として「漢字—かな（ローマ字）の相互変換システム」の開発や、「漢字かなまじり文の文字のエントロピーの計算」などを続けてきた。

これらの調査研究の成果は、年間計画に基づいて刊行される各報告書に発表するほか、軽印刷による部内報告「LDP」に随時発表している。

D 本年度の研究

前年度までに、「言語単位分割」「品詞認定」「活用形処理」「漢字解読」などを、自動化するプログラム・システムが一応できあがり、漢字かなまじりのデータを、電子計算機で一貫的に処理しうの見通しがついた。

今年度からは、その効率化と精度の向上をはかるために、つぎのような研究に着手した。

1) 語句の構造と相互接続に関する調査研究

電子計算機によって、構文解析や同語異語の判別などを行なうためには、語句の内部構造、あるいは語句相互の接続形態を確実に把握しておく必要がある。この研究は、別項の科学研究費による研究と密接な関係を保ちつつ進めた。語句の構造に関しては、「助詞『に』を含む動詞句の構造（石綿敏雄）」

「あいまいさを伴う表現の構造についての一考察（村木新次郎）」などの成果をまとめ、『電子計算機による国語研究(IV)』（報告46）に発表した。また、語句の接続の問題については『電子計算機による新聞の語彙調査(III)』（報告42）に「短単位接続表の作成と分析（中野洋）」「接辞の意味的分類（岡岡昭夫）」「形容動詞語尾・助動詞・助詞の接続形態（田中章夫・中野洋）」などの成果を発表した。

2) 文字の連続確率（エントロピー）の調査

前年度において、確率計算を終了した「漢字かなまじり文のエントロピー表（斎藤秀紀作成）」に引き続き、助詞・助動詞の接続に見られる、文字接続の様相を分析し、その結果を「新聞語彙調査データにみられる助詞助動詞の接続形」（『LDP』）に発表した。

3) KWICシステムの作成と実験

前年度作成した、汎用の索引作成プログラム「COBOL-KWIC（石綿敏雄）」と漢字データ専用の「漢テレKWIC（江川清）」のあとをうけて、今年度は、カタカナ入力専用のシステムによって実験を進めた。

なお、以上各項の研究は、第三資料研究室の土屋信一（室長）、野村雅昭の研究と関連するところが大きい。

E 今 後 の 予 定

本年度実施した調査研究のうち、語句の構造と相互接続に関する調査は、各種の言語処理システムの効率化と精度の向上をはかるための基礎的な研究であり、この成果を、実際の処理システムの設計に、どのように組み入れていくかが、今後の課題である。また、エントロピーの調査は、漢字かなまじりデータについては、一応、所期の成果を収めたので、今後、かな入力のデータについて調査を進めていく予定である。

索引作成のプログラム・システムは、今年度までで、実験段階を終了したので、今後は、実際の言語作品について索引作成に乗り出す予定である。

（田 中）

社会構造と言語の関係についての基礎的研究

A 目 的・意 義

言語あるいは言語生活は、社会生活およびそれを規定している社会構造と密接な関係を持っている。その関係を明らかにするための基礎的準備的研究を行なおうとするものである。

比較的単純な構造を持つと思われる農村について、共通語生活と方言生活との交渉・接触の面を重視しつつ、言語およびその用法(の変動)と社会構造および社会生活(の変動)との関係を明らかにすることを目ざしている。

中心の調査地点としては福島県伊達郡保原町地区および福島市郊外の茂庭地区を選んだ。

B 担 当 者

飯豊毅一(室長, 音韻・文法を中心に言語および言語使用の面), 渡辺友左(語彙および社会構造, ならびに両者の関連の面)が担当し, 米田容子が作業を助けた。

C これまでの経過

昭和40年度に始めたこの調査は、昭和45年度までに次のようなことを行なった。

- (1) 高年層を対象とする、音韻・文法の方言体系の概略の調査と一部の語彙体系(親族語および形容詞・形容動詞)の調査。これについては「福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系——福島北部調査報告Ⅰ——」『ことばの研究』(論集3)や『年報19』等にその一部を報告した。なお、この地方の方言体系の特質を明らかにするために東北地方関東地方等の各地についても参照調査を行なった。

(2) 録音資料による実態調査。話し手の性・年齢・教養等の違いによって使用言語がどのように異なるかを調査するために録音採集を行ない、そのうち8時間分について文字化し、これより採集した約7万枚のカードによって分析を始めた。その一部については『年報』の17, 18, 19, 20に報告した。

(3) 言語使用の意識に関する調査。高年層・中年層・青年層の年代別や性別によって言語使用にどのような違いがあるかをみるために、農家を中心に約220人について面接調査を行なった。

さらに、保原地区における農家の言語使用が地区全体の中でどう位置づけられるかをみるために、全職業にわたって、約550名について、アンケート調査を実施した。

(4) 各種場面における言語使用の変容についての調査。各種場面の言語使用の実際を録音し、分析を始めた。

(5) 社会構造の調査。各種統計表や記録により概観調査を実施した。その一部は『社会構造と 言語の関係 についての 基礎的研究(1)——親族語彙と社会構造——』（報告32）に報告した。

(6) 社会構造と、語彙およびその用法の構造との関連の調査。親族語彙について、それが親族組織およびその社会生活における機能とどのような関係にあるかをみようとした。これについては前記の報告書（報告32）および『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)——マキ・マケと親族呼称——』（報告35）にその一部を報告した。

また、長男・長女、二男・二女以下を意味するアニ・アネ、オジ・オバ名称について、東北地方46地点を対象として通信調査を実施したほか数地点を臨地調査した。

さらに今後の研究を進めるために、方言集から親族語のカード採集を行なった。一方、性向についての価値観と性向語彙の意味用法の構造との関連を明らかにしようとし、東京都内の大学生429名について質問紙法による意識調査を実施したが、ひきつづき、一般社会人159名につい

て、同様な調査を行なった。

D 本年度の作業

1 言語および言語使用の調査

1.1 言語使用の意識に関する調査

面接調査の結果の整理・集計・分析を行なった。これは保原地区と茂庭地区との地域差や年代別・性別等により言語使用にどのような差があるかをみようとしたものである。

3.11 いい天気ですね（目上の人にむかって）

1. イーテンキダナエ 2. イーテンキダナン 3. イーテンキダナオン
4. イーテンキデスネ 5. イーテンキダナシ 6. その他

		1	2	3	4	5	6	NR	計	有意水準	傾向	連合関係
全 体		219 39.7	61 11.1	0	239 43.4	21 3.8	3 0.5	8 1.5	551 100	**		
性別	男	137 43.9	38 12.2	0	113 36.2	16 5.1	3 1.0	5 1.6	312 100	**		**
	女	82 34.3	23 9.6	0	126 52.7	5 2.1	0	3 1.3	239 100 (4**1)	**	(4)	
年 令	20 代	11 17.2	1 1.6	0	50 78.1	1 1.6	0	1 1.6	64 100	** 4**4	4	**
	30 代	26 28.6	11 12.1	0	51 56.0	2 2.2	0	1 1.1	91 100 (4**1)	**	(4)	
	40 代	116 45.1	20 7.9	0	104 40.5	9 3.5	3 1.2	5 1.9	257 100	**		
	50 代	29 47.5	14 23.0	0	16 26.2	1 1.6	0	1 1.6	61 100	**		
	60 代	37 47.4	15 19.2	0	18 23.1	8 10.3	0	0	78 100 (1*4)	**	(1)	
学 歴	小 学 校 卒	26 46.4	14 25.0	0	9 16.1	7 12.5	0	0	56 100	**		**
	高小・新中卒	147 40.2	43 11.7	0	158 43.2	10 2.7	2 0.5	6 1.6	366 100	**		
	旧中・新高校卒	41 36.6	3 2.7	0	62 55.4	3 2.7	1 0.9	2 1.8	112 100 (4*1)	**	(4)	
	大学・旧専卒	5 29.4	1 5.9	0	10 58.8	1 5.9	0	0	17 100	**		

職業	農業	135 48.6	38 13.7	0	92 33.1	9 3.2	2 0.7	2 0.7	278 100	** (1**4)	(1)	**
	土建・メリヤス	15 23.4	5 7.8	0	38 59.4	4 6.3	0	2 3.1	64 100	** (4**1)	(4)	
	サービス商 工品販売	20 34.5	3 5.2	0	30 51.7	4 6.9	0	1 1.7	58 100	**		
	事務関係	15 24.6	4 6.6	0	39 63.9	0	1 1.6	2 3.3	61 100	* (4*4)	4	
	無職	30 39.5	10 13.2	0	31 40.8	4 5.3	0	1 1.3	76 100	*		
不明		4 28.6	1 7.1	0	9 64.3	0	0	0	14 100			

*は危険率5%以下で有意であることを示す。

**は危険率1%以下で有意であることを示す。

4**1は危険率1%以下で4の度数が1の度数に比べて有意に大きいことを示す。

4**4は同様な関係が4と4以外との間に成立することを示す。

また、前年度実施したアンケート調査の整理・集計を行なった。上の表はその一部を例示したものである。

1.2 各種場面における言語使用の変容についての調査

前年度にひきつづき、高年層男性1名について、会議の場面における話し合いの状態を録音し、これを文字化し、さらにカード化した。これによって前年度分とあわせて、次の5場面の資料がすべてカード化された。

- i. 友人との談話 ii. 未知外来者との応対 iii. 会議
 - iv. 未知高校長との談話（於校長室） v. 既知年少者との談話
- さらに、次の4場面の録音資料も比較のために文字化し、カード化した。
- vi. 高年者（寿会）会合 vii. 高年層女性と未知外来者
 - viii. 青年層男性と未知外来者 ix. 青年層女性と未知外来者

その他、役場・農協等の窓口での応対、各種会議、商店における応対、家庭における談話等も録音したが、これは参考資料にとどめ、カード化はしなかった。ただし、一部分は文字化してある。

2 社会構造と語彙およびその用法との関連について

2.1 親族組織の構造と親族語の意味用法との関連

これまでの調査の継続である。前年度にひきつづき、長男・長女、二男二女以下を意味するアニ・アネ、オジ・オバ名称に重点を置いて、次の調査をした。

① 臨地調査——栃木県黒羽市・茨城県北茨城市・福井県小浜市の方言の親族語について臨地調査をした。

② 方言集から親族語のカード採集——当研究所所蔵のいわゆる「東条カード」には採録されていない親族語を、各地の方言集・方言辞典の類からカードに採集し、分類整理する作業を継続して行なった。採集カードは約1万4千枚。

2.2 性向についての価値観と性向語彙の意味用法の構造との関連

前年度と前々年度に実施したアンケート調査の集計整理にあたり、ほぼその作業を終えた。

調査は次年度に継続し、あわせて次年度には、以上二つの調査の報告書の原稿をまとめる予定である。

(飯 豊)

現代語の表記法に関する研究

——新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究——

A 目的・意義

国語の正書法を確立するうえに役立つ基礎資料を得るために、国語の文字・表記法に関する諸問題を調査・研究する。

B 担当者

調査研究の担当者は、土屋信一（室長）・野村雅昭であり、武田道子が作業を助けた。

C これまでの経過

国語の文字表記についての諸問題を明らかにするために、これまで二つの方向から調査研究を進めてきた。一つは読み手および書き手を対象とした、表記行動に関する調査であり、いま一つは、書かれた文字資料を対象とした文字表記の調査研究である。前者としては、「文字使用の実態調査」を取り上げ、送りがな表記に関する意識調査を行ない、その結果を、前年度末『送りがな意識の調査』（報告40）として刊行し、終結させた。

後者として、42年度から「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」を取り上げ、調査研究を進めてきた。これは、第一資料研究室と言語計量調査室が進めている電子計算機による新聞の語彙調査にともない、漢字および表記の研究を行なうものである。語彙調査によって作成されたデータに、機械および人手による処理を施し、各種漢字表、語表記表を作成し、その分析・記述を行なうというのが、そのあらましである。

研究は漢字と表記の両面から進めており、前者のほうが先行している。これまでに、いわゆる「1紙1年分」（全体の3分の1のデータ量）の層別漢字表と、1紙朝刊前半分長単位用語例表を作成し、前者をもとに、中間集計の

結果を、『現代新聞の漢字調査（中間報告）』（資料集8）として刊行した。また、分析の結果を、『電子計算機による国語研究Ⅳ』『国研LDP8, 9』などに発表した。また、全体の集計のための処理システムの検討を行ない、各種プログラムを作成した。

また、表記の面からの研究は、準備的段階として、出典台帳カードの作成に取りかかった。機械処理システムの検討にも着手した。

D 本年度の作業

1 漢字に関する研究

(1) 出典台帳カードの作成

漢字および表記の研究を進めるためには、いちいちの出典に戻ってその用法を明らかにする必要がある。その検索の手段として、この出典台帳カードを作成した。これはサンプリングしたデータのブロックごとに、新聞縮刷版を切り抜きあるいは複写して、カード化したものである。前年度末までに1紙1年分の出典台帳カードを作成したのに引き続き、残りのデータについてもカードを作成して、朝日・毎日・読売3紙1年分の台帳カード約14,000枚を完成させた。

(2) 全体用語例台帳の作成

語彙調査の最終集計用の簡易五十音順ファイルより、漢字を用いて表記された語例を抜き出して、磁気テープファイルを作った。次に、それをもとに全用語例を漢字テラタイプで印字し、出典情報・層別情報をラインプリンタで打ち出したものと合わせて、作業用の台帳を作成した。この台帳から(1)の出典台帳カードに戻ることによって、各語例の原文での用法を検索することが可能になった。

(3) 漢字表記語台帳の作成

上記(2)で作成した作業用台帳をもとに、漢字で、または、漢字を含んで表記された語の表記形式を一覧できるような台帳の作成に取りかかった。今年度は、調査単位の整理、読みがなづけ、同表記異語の判別などを行なった。

(4) 新聞使用漢字の分析

○新聞の文章を資料として、漢字かなまじり文における漢字とかなの出現類型に関する分析を行なった。分析の結果については、下記の論文に述べたほか、11月に行なわれた、「電子計算機による言語調査」の研究発表会で「漢字かなまじり文の機能」というテーマでも発表した。

野村雅昭「漢字かなまじり文の文字連続」(『電子計算機による国語研究 IV』所収)

○前年度に作成した、「朝日新聞朝刊前半漢字表」から、まぜ書き語の語例を採集し、約250例を得た。その内訳は、下記のとおりである。

〔漢語〕 35例

- ・表外字—かな 33例……い縮(萎)・誘かい(拐)等
- ・表内字—かな 2例……ずい分(随)・理くつ(屈)

〔和語〕 180例

- ・表外字—かな 69例……くつ下(靴)・灰ザラ(皿)等
- ・表内字—かな 111例

{ 表外訓 20例……スベリ台(滑)・縫いしろ(代)等
{ 表内訓 91例……おや指(親)・若もの(者)等

〔その他〕 29例……………空びん(壺)・皮カバン(鞆)等

○前年度に刊行した『現代新聞の漢字調査(中間報告)』(資料集8)に、中間集計に出現したすべての漢字の制限範囲別(字種別)使用度数を示したが、今年度は、その補遺として、層別に制限範囲別使用度数を集計した。結果を次ページ以下に示す。

2 表記に関する研究

表記に関する研究は、主として語表記の研究に目標を置いている。そのためには、語表記が一覧できる表を作る必要がある。磁気テープにはいつている新聞語彙調査のデータを、いかにして機械と人手によって処理して語表記一覧表を作成するか、が本年度の課題であった。

新聞漢字調査中間集計 層別・制限範囲別使用度数

() 内の数字は、パーセント。

(異なり度数)

	当 用 漢 字						表 外 漢 字					計
	教漢	育字	準教育漢	○補正漢	その他	小 計	+補正漢	人名用漢	その他	小 計		
政 治	849	96		2	528	1,475 (92.0)	13	30	85	128 (8.0)	1,603 (100.0)	
外 交	630	49	—		190	869 (97.2)	2	9	14	25 (2.8)	894 (100.0)	
経 済	780	86		4	393	1,823 (91.4)	8	28	85	121 (9.6)	1,404 (100.0)	
社 会	877	113		7	676	1,673 (85.5)	21	53	209	283 (14.5)	1,956 (100.0)	
国 際	846	90	—		492	1,428 (94.0)	9	16	69	94 (6.0)	1,522 (100.0)	
文 化	857	105		7	573	1,452 (85.1)	19	44	206	269 (14.9)	1,811 (100.0)	
スポーツ	789	81		5	398	1,273 (86.2)	8	45	150	203 (13.8)	1,476 (100.0)	
婦 人	804	98	—		401	1,303 (94.2)	11	24	45	80 (5.8)	1,383 (100.0)	
芸 能	866	110		8	604	1,588 (79.6)	20	66	321	407 (20.4)	1,995 (100.0)	
小 説	722	75		5	335	1,137 (88.0)	13	20	122	155 (12.0)	1,292 (100.0)	
商業広告	879	108		12	642	1,641 (74.6)	20	60	476	556 (25.4)	2,197 (100.0)	
案内広告	850	98		13	565	1,526 (78.7)	18	51	344	413 (21.3)	1,939 (100.0)	

(延べ度数)

	当 用 漢 字					表 外 漢 字					計
	教 漢 字	育 準 漢 字	補 正 漢 字	○補 正 漢 字	そ 他	小 計	+	補 正 漢 字	人 名 用 漢 字	そ 他	小 計
政 治	46,151	1,090	7	3,450	50,698		39	205	229	473	51,171
					(99.0)					(1.0)	(100.0)
外 交	5,846	134	—	457	6,437		4	24	55	83	6,520
					(98.7)					(1.3)	(100.0)
経 済	56,588	1,704	37	5,162	63,491		87	519	1,410	2,016	65,507
					(96.9)					(3.1)	(100.0)
社 会	81,501	2,579	15	7,254	91,349		121	500	895	1,516	92,865
					(98.4)					(1.6)	(100.0)
国 際	37,112	998	—	2,934	41,044		14	34	172	220	41,264
					(99.5)					(0.5)	(100.0)
文 化	31,228	935	10	2,872	35,045		49	249	476	774	35,819
					(97.8)					(2.2)	(100.0)
スポーツ	29,656	799	14	3,237	33,706		94	442	829	1,365	35,071
					(96.1)					(3.9)	(100.0)
婦 人	12,643	562	—	1,270	14,475		30	34	75	139	14,614
					(99.1)					(0.9)	(100.0)
芸 能	46,421	1,912	43	5,938	54,314		162	1,060	932	2,154	56,468
					(96.2)					(3.8)	(100.0)
小 説	5,440	209	6	828	6,483		28	113	215	356	6,839
					(94.8)					(5.2)	(100.0)
商業広告	58,868	2,432	63	6,694	68,057		118	630	1,641	2,389	70,446
					(96.6)					(3.4)	(100.0)
案内広告	132,226	4,162	196	13,426	150,010		250	524	2,945	3,719	153,729
					(97.6)					(2.4)	(100.0)

処理システムの検討の結果、次のような流れを考えた。

- (1) 長単位用語例・出典情報の付いた短単位表記形一覧表を作成する。(機械処理のみ)
- (2) 長単位用語例をもとに、同語異語の判別を行なう。(人手)
- (3) 長単位用語例では判定の不能のものは、出典情報をもとに出典にさかのぼり、出典台帳カードによって判別し、整理する。(人手)

このうち、(1)の途中までで本年度は終わった。

上記の流れによる作業は、相当長い期間にわたる労力を要するため、これとは別に、かな書きの長単位語を抜き出して、整理することを先行させることも考えている。これは、漢字表記語台帳に対するものである。

このほか、各種文献資料の用語用字研究に資するため、KWIC・KWC兼用形式による片かなの文脈つき語彙索引を作成するプログラムを作った。(土屋信一「カナ入力による日本語文総索引の作成」『電子計算機による国語研究IV』所収)

E 今後の予定

1 漢字に関する研究

漢字表記台帳を作成し、それをもとに、各漢字ごとに用法別の集計をした漢字台帳を作成する。また、度数集計については、電子計算機による処理を開始する。

2 表記に関する研究

47年度は、長単位用語例・出典情報付き短単位表記形台帳作成のためのプログラミングと機械処理を続行する。おそらく磁気テープで100巻を越すほどの量になると思われるので、機械処理にかなりの時間を費やすであろう。これと並行して、かな書き長単位語の整理と分析を行なう予定である。

(土屋)

漢字機能度の研究

A 目 的・意 義

漢字の一字一字が、現代語の中で、単語または造語要素としてどのように働いているかを、書きことば資料について大量に調べ、各文字の機能上の特徴を数量的に明らかにする。

B 担 当 者

第四研究部長林四郎と第三資料研究室の土屋信一(室長)、野村雅昭が担当し、小林信子が協力した。

C 本 年 度 の 作 業

三年計画の第二年次に当たる。前年度に引き続き、雑誌の語彙調査(婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種)で採集された用語のうち漢字を含む語を、漢字を見出しとする一覧表に転記し、この作業を完了した。

D 今 後 の 予 定

雑誌の語彙調査結果によって作成した漢字語彙一覧表に、現在実施中の新聞語彙調査の結果を記入する。

(林)

電子計算機による語彙調査

——新聞を資料とする——

A 目 的

婦人雑誌，総合雑誌，雑誌九十種と続けてきた現代語の用語の実態調査をカードによる人為作業から電子計算機による自動処理に移して，データの処理量をふやし，語彙調査の今日的課題の解決に役立てるようにすることを目的とする。現代の新聞につき三百万語の標本をとり，語彙の実態を明らかにしようとする調査研究である。

B 担 当 者

言語計量調査室の石綿敏雄(室長)，斎藤秀紀，村木新次郎および第一資料研究室の田中章夫(室長)，江川清，中野洋，靈岡昭夫(46.8.1採用)がこれに当たり，言語計量調査室の花井夕起子(46.12.31退職)，桜井敏子(46.11.1採用)・小高京子，沢村都喜江，下山いくよ，白井陽子，第一資料研究室の益子芳江，堀江久美子，紺野雅子(46.6.30退職)が研究作業を助けた。

C これまでの経過

昭和41年1月から12月までの新聞三紙(朝日・毎日・読売)一年分を対象とする語彙調査は42年末までに，サンプリング作業，計算機にかけるための前処理作業および長単位処理プログラムの作成をほぼ完了し，一紙朝刊半年分についてテストランを実施した。漢字テレタイプによる原データのさん孔作業と，それを入力して長単位関係の磁気テープ上の各種ファイルを作成するオペレートとは，昭和42年末までに全体量の3分の1を終了した。昭和42年度には，短単位処理のプログラムの設計にとりかかり，昭和44年度に全体の三分の一に当たる量の機械処理を完了，同年度末に長単位68万，短単位94万につき，各種の配列法による出現頻度表を報告書(報告37)として刊行し

た。昭和45年度には残る三分の二の標本の長単位機械処理を大体終わり、この分についての中処理（単位切り、漢字に読みがなをつける等）を完了した。

D 本年度の研究作業

本年度の研究作業のおもなものは次の通りである。

1 長単位機械処理

全標本の三分の二に当たる量の処理を完了した。これと、さきに処理済みの三分の一に当たる量とを加えて全データの磁気テープファイルを作成した。延べ度数は長単位で約二百万異なり二十三万にのぼる。

2 短単位中処理

上記のアウトプット資料について、短単位に分割し、漢字に読みがなつけ語種・品詞・活用などの情報を付加する等の人為作業（中処理）を行ない、この年度内に完了した。

3 短単位入力

上記の結果をインプットするための漢テレによるさん孔作業で、この作業内に等一次さん孔を終わり、校正も大体終了し、あと修正を残すのみとなった。

4 語彙表作成。

本年度は、造語要素・接辞など、語構成の実態を知るための手がかりとして次のような内容をもつ語彙表『電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)』（報告42）を作成、刊行した。

短単位連接表の処理と分析

短単位位置別集計表

名詞性接辞連接表

用言性接辞連接表

形容動詞語尾別表

助詞・助動詞連接表

E 今 後 の 予 定

47年度中に長単位語彙表作成のためのアウトプットを行ない、度数順および簡易五十音順語彙表を作成、刊行する。このほか短単位機械処理を行ない長単位を用例とする短単位の索引を作成するためのファイルを作る。また、各単語の原文における用例が容易に見られるように、K W I C形式の文脈つき語彙索引を作成する。これらによって、新聞用語の内容的分析を進める予定である。

(石 綿)

国語および国語問題に関する情報の収集・整理

国語に関する学問の研究成果一般を知り、あわせて関係学界の動向や言語および言語生活に関する世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和46年1月から12月までに刊行された図書・雑誌・新聞について、その期間内に発表された文献の調査を行なった。これら文献の目録は、その他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和47年版）に掲載されている。

以下、そのおのおのについて分類し、冊数または点数を示し、大まかな傾向を知る手がかりとする。（ ）内に前年の数を示し、今年との状況と比較できるようにした。

なお、外国発行の刊行図書・雑誌については、その採録範囲を日本語の研究および日本語教育に関するものに限定した。

以上の調査および国語年鑑に関する作業は、次のものが担当した。

伊藤菊子　田原圭子　中曽根仁

I 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・判型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、「納本週報」（国立国会図書館）、その他の目録から情報を補い、総数647冊についての分類目録を作成した。

刊行書の分類と、その冊数

国　語（学）		文　字・表　記	10（20）
国語一般	27（12）	語　彙・用　語	
国語史	39（29）	語彙・用語	12（24）
音　声・音　韻	9（6）	人名・地名	6（5）

文	法	10 (11)
---	---	---------

文	章・文	体	10 (4)
---	-----	---	--------

方	言・民	俗	47 (71)
---	-----	---	---------

コミュニケーション

コミュニケーション一般 15 (8)

言語技術 (話し方・書き方)
35 (38)

情報処理 1 (4)

マス・コミュニケーション	5 (5)
--------------	-------

国語国字問題	3 (2)
--------	-------

国語教育

国語教育一般 5 (12)

学習指導一般 17 (34)

ことばの指導一般 1 (3)

語彙・文字教育 4 (2)

文法教育 0 (0)

聞く・話す 0 (0)

読む・読書指導 5 (7)

書く・作文指導 4 (4)

文学教育 2 (4)

幼児教育 (幼児の言語) 12 (7)

特殊教育 3 (6)

学力調査 1 (1)

国語教科書・その他 6 (5)

日本語の研究と教育	5 (4)
-----------	-------

言語学その他	56 (51)
--------	---------

辞典・用語集

国語辞典 8 (5)

用語辞典・用語集 36 (15)

特殊辞典 25 (9)

索引 13 (9)

資	料
---	---

資料 11 (17)

史料 11 (12)

解題・目録 19 (9)

年鑑 14 (15)

計 487 (470) 冊

追	補
---	---

国語学その他 27 (18)

音声・音韻 5 (0)

文字・表記 2 (9)

語彙・文法 15 (14)

方言・民俗 20 (37)

コミュニケーション 3 (17)

マス・コミュニケーション 9 (0)

国語問題 1 (2)

国語教育 11 (19)

日本語の研究と教育 8 (3)

言語学その他 18 (22)

辞典・索引・資料 41 (36)

総計 647 (647) 冊

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆署名・誌名・巻号数・発行年月およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては，「雑誌記事索引」（国立国会図書館）の人文・社会編および科学技術編，「LLBA」（Language and Language Behavior Abstracts），その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は，2,549 点に達した。（連載物については，毎回ごとに 1 点と数えることはせず，その題目について 1 点と数えた。）

1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数（目録類から採録した分は含まない。）

a 一般刊行雑誌（学会誌を含む）……345（329）種

国語・国文・言語ほか	118（120）	週刊誌・総合誌	1（2）
方言・民俗	12（10）	文芸・詩歌・芸能	6（6）
国語問題	5（4）	その他（教育・社会学・	
国語教育	32（31）	心理学ほか）	78（72）
マス・コミ関係	12（12）	臨時にはいった雑誌	24（19）
外国語	10（11）	外国誌	47（42）

b 大学・研究所等の紀要・報告類……221（211）種

2 論文・記事の分類とその点数

国語（学）	189（141）	音声・音韻一般	28（22）
時評・随筆	56（52）	史的研究	21（26）
国語史		アクセント・	
国語史一般	33（32）	イントネーション	12（10）
訓点資料関係	10（15）	文字・表記	0（1）
音声・音韻		文字・字体	19（14）
		表記	33（42）

語彙・用語		民 俗		2 (2)	
語彙・用語一般		65 (91)	コミュニケーション		
古 語		54 (41)	コミュニケーション一般		14 (25)
現代語		9 (16)	言語生活		42 (25)
新語・流行語		3 (9)	言語活動		
外来語		8 (14)	言語活動一般		51 (2)
人名・地名 (命名)		4 (13)	書く・読む		28 (39)
辞書・索引		24 (10)	話す・聞く		4 (20)
			情報処理		42 (42)
文 法			マス・コミュニケーション		
文法上の諸問題 (現代語法)		37 (149)	一般の問題		2 (2)
史的研究		24 (43)	新 聞		0 (7)
敬語法		6 (15)	放 送		41 (25)
文 章・文 体			広告・宣伝		4 (2)
文章・表現一般		28 (66)	印刷・出版		0 (4)
史的研究		73 (97)	国 語 問 題		
古 典 の 注 釈			国語問題一般		67 (85)
注釈一般		2 (9)	(うち、音訓・送りかな改定案 および意見		14 (42))
上 古		13 (6)	表記法		10 (21)
中 古		11 (15)	国 語 教 育		
中 世		4 (5)	国語教育一般		71 (34)
近世以降		9 (13)	言語能力の発達		17 (9)
方 言・民 俗			国語教育史		5 (14)
方言一般		21 (15)	学習指導一般		197 (59)
各地の方言			ことばの教育一般		16 (36)
東 部		34 (28)	文字・表記教育		27 (10)
西 部		12 (29)	ローマ字教育		5 (3)
九州・沖縄		28 (18)			

語彙教育	3 (6)	書 評・紹 介	
文法教育	8 (35)		
聞く・話す	2 (28)		国語 (学) その他 18 (26)
読む・書く			音声・音韻 2 (7)
読む・書く一般	20 (59)		文字・表記 2 (7)
読解指導	30 (42)		語彙・文法 4 (23)
読書指導	21 (32)		辞書・索引 3 (0)
作文教育	70 (121)		文章・文体 4 (12)
文学教育	17 (37)		方言・民俗 4 (15)
古典教育	1 (11)		コミュニケーション 5 (0)
漢文教育	11 (2)		国語問題 0 (3)
特殊教育	18 (14)		国語教育 16 (17)
学力評価	15 (5)		言語 (学) その他 33 (27)
国語教科書・教材研究	51 (37)		計 2,261 (2,401) 点
日本語の研究と教育	55 (50)	追 補	
言 語 学			
言語一般	133 (104)		国語 (学) その他 17 (19)
意 味	9 (7)		国語史 8 (17)
比較研究	9 (10)		音声・音韻 12 (16)
翻訳の問題	8 (14)		文字・表記 10 (25)
外国語研究	19 (58)		語彙・用語 39 (42)
外国語教育 (学習)	96 (18)		文 法 13 (15)
各国の言語問題	11 (12)		文章・文体 18 (41)
資 料			注 釈 14 (15)
資料一般	4 (2)		方言・民俗 14 (28)
国語資料	16 (13)		コミュニケーション 27 (20)
翻 刻	24 (21)		国語問題 2 (6)
目 録	4 (3)		国語教育 42 (72)
			日本語の研究と教育 24 (4)
			言語 (学) その他 48 (76)
			総計 2,549 (2,797) 点

なお、今年は、当研究所図書館所蔵の索引類・『国語年鑑』所載の文献目録などを参考資料として、「国語関係文献の索引目録」を作成し、『国語年鑑』（47年版）の資料の部に掲載した。

III 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き点数は2,578点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		西日本	
朝日	284 (505)	週刊・その他	119 (309)
(大阪)*	(2) (2)	日本読書新聞	39 (29)
毎日	313 (314)	週刊読書人	50 (76)
読売	357 (303)	図書新聞	41 (29)
(大阪)*	(3) (5)	新聞協会報	39 (32)
東京	304 (217)	教育學術新聞	14 (17)
サンケイ	681 (412)	その他	63 (36)
日本経済	149 (147)		
北海道	120 (151)		
		計 2,578 (2,584) 点	

* (大阪) は、各紙の大阪版であって、山田房一氏から、関係記事のあるごとに送られたものである。

2 月別の切り抜き点数

1月	162 (203)	2月	217 (233)	3月	233 (256)
4月	213 (182)	5月	234 (211)	6月	210 (195)
7月	210 (243)	8月	200 (172)	9月	199 (215)
10月	255 (224)	11月	217 (263)	12月	228 (214)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	178 (215)	音声・音韻	11 (24)
---------	-----------	-------	---------

文	字		読 書	43 (44)
文字・表記	15 (16)		ことばと機械	37 (33)
活 字	20 (11)		国 語 問 題	
語	彙		国語問題一般	23 (90)
語彙一般	116 (194)		表記の問題	
各種用語	38 (45)		表記一般	35 (18)
新語・流行語・隠語	92 (97)		当用漢字など	58 (36)
外国語・外来語	50 (56)		かなづかい	9 (5)
辞 書	60 (53)		送りがな	1 (5)
問題語・命名	112 (146)		かな書き	7 (6)
人名・地名	391 (245)		横書き・縦書き	3 (4)
文	法	7 (12)	人名・地名の表記	17 (14)
文	体		外来語表記	9 (9)
文体・表現	62 (34)		ローマ字	3 (6)
方	言		国 語 教 育	
方言一般	36 (7)		国語教育一般	45 (69)
方言と標準語	15 (4)		学習指導の問題	
各地の方言	15 (59)		学習指導一般	31 (16)
言 語 生 活			話す(聞く)	5 (2)
言語生活一般	66 (108)		読む(読書指導)	30 (27)
ことばの問題	43 (41)		書く(作文指導)	5 (7)
ことばづかいの問題	25 (25)		文学・古典教育	2 (4)
敬語の問題	18 (24)		特殊教育	31 (13)
言 語 活 動			視聴覚教育	4 (6)
言語活動一般	18 (1)		学力テスト	10 (5)
話すこと(聞くこと)	47 (38)		幼児語教育	32 (65)
書くこと(読むこと)	31 (26)		言 語 学	
			言語一般	56 (57)

外国語一般	35 (10)	マス・コミ一般	35 (38)
比較研究	24 (21)	新 聞	16 (13)
翻訳の問題	60 (43)	放 送	37 (40)
外国語教育	88 (68)	宣伝・広告	46 (34)
外国語に関する紹介ほか	19 (29)	出 版	59(108)
日本語の研究と教育	62 (51)	書評・紹介ほか	133 (109)
マス・コミュニケーション		計	2,578 (2,584) 点

上記のごとく、切り抜き点数は昨年とほぼ同じである（くわしくは、『国語年鑑』＜47年版＞に掲載）。分類項目の中で、昨年に比して、特に点数の少ないものがあるが（例えば、「幼児語教育」・「言語生活一般」など）、それは、前年度の年報、および、国語年鑑に記載したように、前年のみ例外的に多かったため、本年の点数は大体例年どおりである。

例年に比して、点数が多いのは、「外国語教育」の項目である。これは、中国語の学習に関する紹介記事が多かったことによる。ピンポン外交以来、脚光をあびている中国ブームの反映かと思われる。また、サンケイ新聞の記事が多いのは、前年に引きつづき、「地名」がほぼ毎日連載されたためである。これは、現在の東京都の各町名について、命名の由来などを簡単に解説した記事であり、「地名・人名」の点数が多いことも同じ理由による。

〔付〕所外からの質問について

昭和46年度に電話で受けた質問件数を月別に示すと次のとおりである。

月 計	46年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	47年 1月	2月	3月
740	71	50	73	67	54	52	69	60	65	72	47	60

質問の内容は、例年どおり多方面にわたっていた。用字用語について 146 件と件数が多いのも例年どおりであった。漢字の読み 104 件、このなかでは相変わらず姓名に関するものが39件で多かった。字体に関して45件、送りがな

（たとえば、行う・行なう、話・光・答など名詞として用いる場合など）39件、かなづかい（たとえば、じ・ぢ、ず・づ、え・への使い分け、「こんにちは」の“は”についてなど）28件、当用漢字、および、国語政策に関して26件、敬語に関して24件、文法上の問題19件などが、件数の多かったものである。そのほか、研究所および研究所の刊行物についての照会が60件あった。電話の質問のほかには、はがき・封書による質問が21通、直接来所して質問したのが7件ほどあった。

以上の質問件数は、すべて質問の係を通ったもので、所員が直接個人的に受けた質問は含んでいない。

（田原，中曽根）

科学研究費補助金による研究

日本語の電子計算機処理のための基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）（総合研究A）

<研究目的>

電子計算機の普及と情報化社会の進展により、言語を電子計算機で取り扱う、いわゆる言語情報処理が実用化されるようになり、より高度な処理法の研究開発も行なわれるようになってきている。その処理技術基礎の一つとして、言語の基本単位である文の処理があり、これが言語情報処理の研究開発の重要な問題点となっている。この研究は、文の自動処理法の開発を目的としている。

<実施の概要>

上記の目的を達成するために、言語の構造を計算言語学の立場から分析し、①計算可能な文法規則の系および lexicon を作ること、②文を取り扱うアルゴリズム（計算手順）を開発してプログラム化すること、③人間の言語行動をシミュレートし、プログラムに学習機能を付与する研究、を並行的にすすめる必要がある。本年度は、①新聞、文学作品などについて文脈つき語彙総索引数点を作り、分析用データを作成した。またそのデータによって、名詞と動詞の結合規則を作った。（助詞「に」を含む動詞句については完成、発表した。石綿敏雄「助詞『に』を含む動詞句の構造」（『電子計算機による国語研究』所収）「を」「が」「の」については表を作成または作成中。このほか、指示語による文意の受けつぎの実態を調査した。林四郎「指示連体詞『この』『その』の働きと前後関係」（『電子計算機による国語研究』所収）②context free grammatical rules による構文解析アルゴリズムを開発し、これによる構文解析実行のプログラムを作成、実験した。③人間の言語活動を発達過程からとらえるための行動の観察と研究資料の作成を行なった。

社会変化と言語生活の変容（代表岩淵悦太郎）（試験研究(1)）

＜研究目的＞

近年人口動態の活発化により、人口の地方における過疎化および都市周辺における過密化の現象がいちじるしい。国語の分野でもこのような社会の変化によって非常な影響を受けているはずである。一方、社会統合の基礎となるべき共通語の普及の重要性はますます大きくなってきた。ところが在来の方言学ではこれらの新しい分野の研究は不可能であった。本研究はこの研究の空間を埋め、国語および住民の言語生活の実態を正しく把握し、これによって共通語化や、これに劣らず重要な敬語問題をどのように進めるべきかの方策立案に資するべく、まず過去の調査による比較資料のある過疎地帯および中間的な性格の都市において調査をしようとするものである。

＜実施の概要＞

敬語については来年度にすることとし、本年度は調査地点を山形県鶴岡市とし、本研究所が昭和25年に調査したものと、同一地点で、ほぼ同一規模による調査を実施して地域社会の共通語化が、この二十数年間にどのように変わったかを統計的につかむ。また、前回の被調査者を可能な限り調査して、その間にこの個個人にどのような変化が言語上あったかを知らうとする。このために、次のような調査をした。

- 1 この二十数年間の地域社会の社会的変化を各種統計資料類などを使って記述し、これと言語および言語生活の変容との関係を解明する一つの基礎資料を作る。
- 2 前回の被調査者の所在をつかむための聞き込み調査。
- 3 前回使用の調査票を今回用に補正するための言語の準備調査および予備調査。
- 4 メイン・サーベイとして、ランダム・サンプリングにより 400 人の市民を抽出しての面接調査。この調査は音韻・アクセントを主とするが、また文法・語彙についても調査し、社会的態度についての調査をつけ加えた。実際の被調査者は、男180、女220、合計400であった。3月中旬実施。

5 上記3の調査によって今の住所のわかった前回被調査者の追跡調査。調査時期・調査票とも4と同じ。被調査者数は男49, 女58, 合計107であった。

6 上記4および5で得られた結果は、電子計算機により集計された。昭和47年度中に報告書の原稿をまとめる予定である。

なお、統計班として統計数理研究所、社会班として本研究所のほかには東京大学新聞研究所・東京都立大学、言語班として本研究所のほかには東京外国語大学の研究者が参加した。

現代語の形成過程に関する基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）（一般研究B）

<研究目的>

明治・大正・昭和の百年間における日本語の実態を巨視的にとらえ現代語の形成過程に関する次の問題点を明らかにする。

- 1 和語・漢語・外来語の消長
- 2 語表記の推移
- 3 漢字含有率の変遷

<実施の概要>

本年度は上記の研究を行なうため、前年度に採集を完了した東京日日新聞（毎日新聞）のカード約15万枚の単位および記入情報（語種・品詞・出典＜記事欄、所在＞固有名詞）を点検し、総索引を作成した。ただし、カードの点検作業に予想外に手間取ったため、総索引の一部および分析については、47年度以降にもちこすこととなった。

図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和46年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

図 書

受 入……………1,816冊

	購入	寄贈	製本雑誌	その他	計
和 書	921	198	404	51	1,574
洋 書	156	15	71	0	242
計	1,077	213	475	51	1,816

逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入……………595種

	購 入	寄 贈	計
和	53*	492	545
洋	32	18	50
計	85	510	595

* 新聞（8種）を含む

（大塚）

庶務報告

I 庁舎および経費

1 庁舎

所 在	東京都北区西が丘3丁目9番14号	
敷 地		10,030m ²
建 物		
本 館	鉄筋コンクリート二階建 (延)	1,576m ²
図書館	鉄筋コンクリート平屋建書庫積層 (延)	213m ²
電子計算機室	鉄筋コンクリート平屋建	118m ²
その他付属建物	(延)	1,452m ²
計		3,359m ²

2 経 費

昭和46年度予算総額	193,958,000円
人件費	117,729,000円
事業費	74,426,000円
各所修繕	1,803,000円
昭和46年度文部省科学研究費補助金総額	3,800,000円
総合研究 (A)	2,000,000円
試験研究 (1)	1,000,000円
一般研究 (B)	800,000円

II 評議員会 (昭和47年3月31日現在)

会 長 久松 潜一 副会長 有光 次郎
(47.1.13会長就任)

阿部 吉雄 石井 庄司 石井 良助
(46.7.12就任)

江尻 進	遠藤 嘉基	尾高 邦雄
高津 春繁	佐伯 梅友	佐々木八郎
沢田 慶輔	千葉雄次郎	永井 健三
中村 光夫	西尾 実	西脇順三郎
前田 義徳	松方 三郎	山本 有三
渡辺 茂 (46. 5. 10死亡)		

III 組 織 と 職 員

1 定 員 75名

2 組織および職員 (昭和47年 3 月31日現在)

	職 名	氏 名	備 考
国立国語研究所	所 長	岩淵悦太郎	
庶 務 部	部 長	的場 益男	46. 4. 1岡山大学に転出
	部 長	井上 繁	46. 4. 1一橋大学から転入
庶 務 課	課 長	酒井 睦夫	
	課長補佐	国井 和朗	46. 4. 1奈良国立文化財研究所から転入
		西山 博	46. 4. 1国立西洋美術館に転出
		菊地 貞	46. 4. 1国立磐梯青年の家から転入
		岡本 まち	
		根岸佐代子	
		田島 正幸	
会 計 課	課 長	根岸 達躬	
	課長補佐	山本 昌志	
		金田 とよ	
		中村 佐仲	
		加藤 雅子	
		南 弘一	
		岩田 茂男	

図 書 館		鈴木 亨	
		安藤信太郎	
		木村 権治	
		浅香 忠雄	46. 4. 1 採用
		大塚 通子	
第一研究部		大浪由紀夫	
	部 長	野元 菊雄	46. 9. 17～46. 12. 16外国出張(ハワイ)
	話しことば研究室 室 長	上村 幸雄	
		中村 明	
		高田 正治	
書きことば研究室		衛藤 蓉子	
	室 長	西尾 寅弥	
		宮島 達夫	
		高木 翠	
	地方言語研究室 室 長	徳川 宗賢	
第二研究部		本堂 寛	
		佐藤 亮一	
		高田 誠	
		白沢 宏枝	
		山田千枝子	46. 4. 1 採用
国語教育研究室	非 常 勤	W. A. グローターズ	
	部 長	芦沢 節	{ 46. 5. 21～46. 6. 19国語教育研究室長 事務代理, 46. 10. 21～46. 1. 20 第三 研究部長事務代理
	室 長	村石 昭三	
		根本今朝男	
		天野 清	46. 5. 21～46. 6. 19外国出張(フランス)
言語効果研究室		川又瑠璃子	
		福田 昭子	
	非 常 勤	岡本 奎六	
	室長(併)	芦沢 節	
		高橋 太郎	45. 9. 1～47. 8. 31 外国出張(オーストラリア, ニュージーランド)

第三研究部 近代語研究室	部 長 室 長	大久保 愛	
		鈴木美都代	
		斎賀 秀夫	46. 10. 21～46. 12. 20文部省在外研究員 (フランス)
		飛田 良文	
		松井 利彦	
文献調査室		梶原滉太郎	47. 3. 22 (東北大学から転入)
		牧野 正子	
		田原 圭子	
		中曽根 仁	
		伊藤 菊子	
第四研究部	部 長	林 四郎	{ 46. 9. 2～46. 9. 9言語計量調査室長 事務代理 46. 9. 17～46. 12. 16 第一研究部長 事務代理 47. 2. 4～47. 3. 31 第二資料研究室長 事務代理
第一資料研究室	室 長	田中 章夫	
		南 不二男	46. 5. 1東京外国語大学に転出
		江川 清	
		中野 洋	
		靄岡 昭夫	46. 8. 1 採用
第二資料研究室	室 長	益子 芳江	
		堀江久美子	
		紺野 雅子	46. 6. 30 退職
		飯豊 毅一	47. 2. 4～47. 3. 31まで病氣休暇
		渡辺 友左	
第三資料研究室	室 長	米田 容子	46. 4. 1 採用 47. 3. 31 退職
		土屋 信一	
		野村 雅昭	
		小林 信子	
		武田 道子	
言語計量調査室	室 長	石綿 敏雄	46. 9. 2～46. 9. 9外国出張(ハンガリー)
		斎藤 秀紀	

	村木新次郎	
	花井夕起子	46. 12. 31 退職
	小高 京子	
	沢村都喜江	
	下山いくよ	
	白井 陽子	47. 3. 31 退職
	桜井 敏子	46. 11. 1 採用

IV 研 究 発 表 会

電子計算機による言語調査（来会者約150名）

日時 昭和46年11月17日（水）午後1時30分～4時30分

場所 岩波ホール

あいさつ	所 長	岩淵悦太郎
語彙調査システムの問題点	研究員	斎藤 秀紀
短単位連接表による語構成の分析	研究員	中野 洋
漢字かなまじり文の機能	研究員	野村 雅昭
表記調査システムの構想	第三資料研究室長	土屋 信一
質疑応答 司会	言語計量調査室長	石綿 敏雄

V 外国人研究員および内地留学生の受入れ

1 外国人研究員

氏名・職名	研究題目	研究期間
アニック・ローラン フランス文部省派遣学 生（フランス）	日本語の情報処理の研究	昭和46. 1. 26から 昭和46. 9. 30まで
ユッタ・キューナスト 国際基督教大学研究生 （西ドイツ）	商業広告における日本語 （特に新聞、雑誌などに おける）の研究	昭和46. 1. 27から 昭和46. 9. 30まで
スタファン・ヤンソン ストックホルム大学生 （スウェーデン）	電子計算機による日本語文 型の研究	昭和46. 10. 1から 昭和48. 9. 30まで

2 内地留学生

氏 名	勤務・職名	研究題目	研究期間
磯山 忠雄	千葉県佐倉市立佐倉 第一小学校教諭	漢字指導を効果的 に行なうにはどの ようにしたらよい か	昭和46.4.1から 昭和47.3.31まで
有川 和秀	鹿児島県始良郡栗野 町立上場小学校教諭	児童の言語能力の 段階的発達の研究	昭和46.5.1から 昭和47.3.31まで
奥野洋一郎	茨城県古賀市立古賀 第四小学校教諭	こどもの心理に即 する国語科の指導 過程について	昭和46.10.1から 昭和46.12.24 まで
福渡 淑子	日本ソフトウェア株 式会社準社員	日本語の語彙文法 論的研究	昭和44.9.1から 昭和47.3.31まで
前田 喜春	新潟県岩船郡朝日村 立高南小学校教諭	読解指導について	昭和46.8.3から 昭和46.8.9まで

VI 日 記 抄

1971. 4. 30 第2期第12回処遇対策委員会（金属材料研究所）
5. 28 文化庁附属機関庶務・会計部課長会議（国立教育会館）
6. 2 文部省所轄研究所長会議（国立文化財研究所）
6. 3～4 第30回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（私学会館）
6. 5 第23回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議（統計数
理研究所）
6. 21 第2期第13回処遇対策委員会（金属材料研究所）
7. 14 第76回国立国語研究所評議員会（国立教育会館）
7. 15 ブラジル日本語専攻教師柳森優氏ほか13名見学
8. 2 ウィーン大学日本学科大学院生レオポルト・マイセルス氏見学
9. 14 フランス・ナンシー大学元学長ポール・インプス氏来訪
9. 22～23 昭和46年度文部省共済組合全国事務担当者打合せ会（農 林 年 金 会
館）
10. 6～7 文部省所轄研究所長会議（緯度観測所）
10. 13～14 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第3部会（福岡）

- 10.27 ハンガリー・デブレツェン大学言語学教授フェレンツ・パップ氏来訪
- 10.29 文部省所轄研究所事務協議会（国立教育研究所）
- 11.10～11 文部省所轄機関事務協議会（江田島青年の家）
- 11.17 国立国語研究所研究発表会（岩波ホール）
- 11.18～19 第22回文部省所管研究所第3部会事務協議会（奈良国立文化財研究所）
- 11.30 第77回国立国語研究所評議員会（国立教育会館）
- 12.8～9 昭和46年度文部省共済組合地区別事務担当者説明会（箱根）
- 12.20 創立記念行事 記念講演・講師阿部吉雄氏
- 1972. 1.27 サンパウロ大学鈴木倂一氏来訪
- 2.29 第78回国立国語研究所評議員会（学士会館）
- 3. 9 各省直轄研究所長連絡協議会総会（農林年金会館）
- 3.30 ロンドン大学教授オニール氏，フランス留学生オデット・マルゴ氏見学

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	品切れ
2	言 語 生 活 の 実 態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 ——用 法 と 実 例——	〃	700円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——鶴岡における実態調査——	〃	600円
6	少 年 と 新 聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	品切れ
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	200円
8	談 話 語 の 実 態	〃	品切れ
9	読 み の 実 験 的 研 究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 識	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語 (前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語 (後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	400円
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	〃
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	品切れ
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) ——対話資料による研究——	〃	800円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	80円
20	同 音 語 の 研 究	〃	550円
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) ——総記および語彙表——	〃	1,000円
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) ——漢 字 表——	〃	1,000円

23	話 し こ と ば の 文 型 (2)	〃	品切れ
	——独話資料による研究——		
24	横 組 の 字 形 に 関 す る 研 究	〃	350円
25	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (3)	〃	1,000円
	——分 析——		
26	小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達	明治図書刊	2,100円
27	共 通 語 化 の 過 程	秀英出版刊	750円
	——北海道における親子三代のことば——		
28	類 義 語 の 研 究	〃	750円
29	戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活	〃	400円
30-1	日 本 言 語 地 図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日 本 言 語 地 図 (2)	〃	〃
30-3	日 本 言 語 地 図 (3)	〃	〃
30-4	日 本 言 語 地 図 (4)	〃	8,000円
30-5	日 本 言 語 地 図 (5)	〃	9,000円
31	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)	〃	250円
	——親族語彙と社会構造——		
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究(Ⅱ)	〃	品切れ
	——新聞の用語用字調査の処理組織——		
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)	〃	450円
	——マキ・マケと親族呼称——		
36	中 学 生 の 漢 字 習 得 に 関 す る 研 究	〃	5,000円
37	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査	〃	1,300円
38	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査(Ⅱ)	〃	2,800円
39	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究(Ⅲ)	〃	700円
40	送 り が な 意 識 の 調 査	〃	1,500円
41	待 遇 表 現 の 実 態	〃	900円
	——松江24時間調査資料から——		
42	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査(Ⅲ)	〃	1,200円
43	動 詞 の 意 味・用 法 の 記 述 的 研 究	〃	5,000円
44	形 容 詞 の 意 味・用 法 の 記 述 的 研 究	〃	3,000円

45	幼 児 の 読 み 書 き 能 力	東京書籍刊	4,500円
46	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (IV)	秀英出版刊	700円

国立国語研究所資料集

1	国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17~24年)	秀英出版刊	品切れ
2	語 彙 調 査 ——現代新聞用語の一例——	〃	〃
3	送 り 仮 名 法 資 料 集	〃	〃
4	明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目	秀英出版刊	300円
5	沖 縄 語 辞 典	大蔵省印刷局刊	品切れ
6	分 類 語 彙 表	秀英出版刊	1,100円
7	動 詞・形 容 詞 問 題 語 用 例 集	〃	1,700円
8	現 代 新 聞 の 漢 字 調 査 (中間報告)	〃	500円

国立国語研究所論集

1	こ と ば の 研 究	秀英出版刊	品切れ
2	こ と ば の 研 究 第2集	〃	750円
3	こ と ば の 研 究 第3集	〃	800円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭 和 24 年 度	品切れ	12	昭 和 35 年 度	350円
2	昭 和 25 年 度	〃	13	昭 和 36 年 度	160円
3	昭 和 26 年 度	160円	14	昭 和 37 年 度	160円
4	昭 和 27 年 度	品切れ	15	昭 和 38 年 度	250円
5	昭 和 28 年 度	240円	16	昭 和 39 年 度	250円
6	昭 和 29 年 度	200円	17	昭 和 40 年 度	250円
7	昭 和 30 年 度	品切れ	18	昭 和 41 年 度	300円
8	昭 和 31 年 度	220円	19	昭 和 42 年 度	300円
9	昭 和 32 年 度	200円	20	昭 和 43 年 度	350円
10	昭 和 33 年 度	品切れ	21	昭 和 44 年 度	400円
11	昭 和 34 年 度	〃	22	昭 和 45 年 度	400円

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭和 29 年版	品切れ	昭和 39 年版	品切れ
昭和 30 年版	〃	昭和 40 年版	1,100円
昭和 31 年版	〃	昭和 41 年版	1,100円
昭和 32 年版	〃	昭和 42 年版	1,100円
昭和 33 年版	〃	昭和 43 年版	1,200円
昭和 34 年版	〃	昭和 44 年版	1,500円
昭和 35 年版	550円	昭和 45 年版	1,500円
昭和 36 年版	800円	昭和 46 年版	2,000円
昭和 37 年版	品切れ	昭和 47 年版	2,200円
昭和 38 年版	950円		

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会	共編 秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所	共著 金沢書店刊	品切れ

昭和47年8月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3—9—14
電話東京 (900)3111(代表)

UDC	058	495.6
NDC		810.5

本書の市販品発行所

東京都新宿区市ヶ谷加賀町2の30 (260) 5281

株式会社 秀英出版

1971—1972

ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1970 to March 1972

Study of Modern Japanese Grammar

Contrastive Study of Dialect Grammars

Cineradiographic Study of Articulatory Movements

Research on Meaning and Use of Verbs and Adjectives

Compiling and Publishing the Linguistic Atlas of Japan

Dynamic Research on Language Abilities of Modern Elementary

School Children and Middle School Pupils

National Survey on Pre-School Children's Language Ability

Study on the Expressional Function and the Communication Effect
of Japanese

Study on the Language of the Meizi Period

Analytic Study of Language Data by Computer

Basic Study on the Relation between Language and Social
Structure

Study on the Writing System of Modern Japanese

Research on Chinese Characters in Modern Japanese

Statistical Investigation of Newspaper Vocabulary

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

3—9—14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO